

1994年度 修士学位論文

# テアル構文の研究

名古屋大学大学院文学研究科  
日本語文化専攻

93M58 杉村 泰

## 要 旨

本研究は、日本語の動詞構文の体系的な記述をし、その構造を明らかにしていく一環として、動詞のテアル形を述語とした構文、「テアル構文」の分析を試みたものである。

従来、テアル表現全体に関わる意味特徴は、益岡(1987)が「意志的行為の結果に重点が置かれる『結果相』の表現」と定義したように、動作主の「意志的行為」という側面が強調されてきた。たしかに、(1)のような文の場合は、何かの「目的」のためという、動作主の「意志」が入っていると言える。

(1) 私は本を読んである。

ところが、次の(2)のような文の場合は、必ずしも動作主の「意志」が入っているとは限らない。

(2) アッ、本が置いてある。

このような表現は、動作主が「意志」を持って本を置いておいたという場面で使われることもあるが、動作主の「意志」はなく、「うっかり置き忘れてしまった」という場面で使われることもある。とすれば、「テアル」は、「意志性」とは無関係であると結論しなければならなくなる。しかし、(1)のような文が「意志性」と深く関わっていることも否定できない。

この点を解決するために、本研究はテアル構文を二種類に分けて考えた。一つは「～ガ～テアル」構文で、もう一つは「～ヲ/ニ/ト/ ～テアル」構文である。前者は、眼前の情景を描写する文で、(2)のように「対象」をガ格に取る。眼前の情景は、動作主の意志的な行為によって生じる場合もあれば、そうでない場合もあるので、「意志性」とは無関係で、「影響性」のみが関与する。後者は、動作主が何かの「目的」のために行った行為を描写する文で、(1)のように「動作主」をガ格に取る。何かの「目的」のための行為は、動作主の「意志性」が関与し、「影響性」も関与する。

こういった特徴は、テアル自体に備わっているのではなく、本来、テアルを包み込む「構文」に備わっているのである。そこで、テアル表現全体に関わる意味特徴は、「行為の結果の『結果相』の表現」と定義されるのである。

また、両構文は、従来言われていた「影響性」に加え、「動作主の人称制限」も関わって連続体をなしている。典型的には、「～ガ～テアル」構文は話し手自身が、「～ヲ/ニ/ト/ ～テアル」構文は話し手以外の人物が動作主となる。しかし、同じように「他者」と言っても、それを「話し手の領域の内部にいる」と認知すれば「～ヲ/ニ/ト/ ～テアル」構文に、「外部にいる」と認知すれば「～ガ～テアル」構文になる。こうして、テアル構文は、一方の典型から他方の典型まで連続的につながっているのである。

その他、本研究は、テイル/テアル/ラレテイルの相違に関して考察を行った。これに関しては、寺村(1984)がその判定基準をあげている。寺村によると、人の意図的な行為による場合には「テアル」が、自然の力や非意図的な人の力による場合には「ラレテイル」が、自然にそのようがあると捉えられた場合には「テイル」が使われるとなっている。しかし、「しまった!逃げられないように外から鍵がかけられている」のように、「ラレテイル」に人の意志が感じられる場合がある。本研究では、「被害」の意味が加わる場合には、人の意志による行為でも「ラレテイル」が使われることを示した。また、本研究は、「情景描写文」に「有対他動詞」が使われた場合は、「目的」の意味が強く出ることを新たに付け加えた。

## 目次

<b>第 1 章 序 論</b> .....	<b>1</b>
1.1 はじめに .....	1
1.2 本研究の位置付け .....	2
1.3 「内的連関」と「外的連関」 .....	3
1.4 研究の立場 .....	3
1.5 研究の意義 .....	5
<b>第 2 章 先行研究</b> .....	<b>8</b>
2.1 テアル構文の位置付け .....	8
2.2 吉川武時の研究とその問題点 .....	9
2.2.1 吉川の研究 .....	9
2.2.2 吉川の問題点 .....	14
2.3 寺村秀夫の研究とその問題点 .....	15
2.3.1 寺村の研究 .....	15
2.3.2 寺村の問題点 .....	20
2.4 益岡隆志の研究とその問題点 .....	21
2.4.1 益岡の研究 .....	22
2.4.2 益岡の問題点 .....	27
2.5 先行研究の問題点の整理と本研究の分析の視点 .....	28
2.5.1 先行研究の問題点の整理 .....	28
2.5.2 本研究の分析の視点 .....	30
<b>第 3 章 テアル構文と動詞の特徴</b> .....	<b>32</b>
3.1 テアル構文の意味と動詞の特徴 .....	32
3.2 他動性 .....	32
3.2.1 動詞の自 / 他 .....	32
3.2.2 動詞の自 / 他に関する先行研究 .....	33

3.2.3	本研究における動詞の他動性の定義	38
3.2.4	「影響性」の有効性と限界	39
3.3	意志性	40
3.3.1	テアル形と「意志性」	40
3.3.2	仮説と検証	41
3.3.3	「意志性」の有効性と限界	53
3.4	影響性と意志性の分離	55
3.4.1	「情景描写文」と「行為描写文」	55
3.4.2	新しい仮説と検証	56
3.5	第3章のまとめ	58
<b>第4章 テアル形を取る動詞の内的連関</b>		<b>60</b>
4.1	動詞の内的連関	60
4.2	従来の分類	60
4.2.1	設置動詞 / 処置動詞 / 放任動詞	61
4.2.2	益岡(1987)の分類	63
4.3	本研究の分類	64
4.3.1	再び発想の転換	64
4.3.2	「情景描写文」と「行為描写文」の分離	65
4.3.3	分析	66
4.3.4	「人称制限」と「感情移入」	76
4.4	第4章のまとめ	79
<b>第5章 テアル構文の名詞項</b>		<b>81</b>
5.1	テアル構文の名詞項	81
5.2	各論	81
5.2.1	動作主の人称	81
5.2.2	「対象」が「有情名詞」か「非情名詞」か	82
5.2.3	情景描写文のガ格の制限	83

5.2.4	～ハ～ガノヲ～テアル	87
5.2.5	「目的」	88
5.2.6	尋常な状態か異常な状態か	92
5.3	第5章のまとめ	94

## **第6章 結 論 -----95**

6.1	本研究のまとめ	95
6.2	残された課題と今後の展望	96

## **参考文献**

# 第 1 章 序 論

## 1.1 はじめに

本研究は、テアル構文の特徴を探っていくものである。従来、テアルの表す様々な意味に共通する意味は、「意志的行為の結果に重点が置かれる『結果相』の表現」とされてきた<sup>1)</sup>。しかし、後の章で考察するように、無意志の行為でもテアル構文を作ることができることから、テアルに共通する意味は、意志の有無とは無関係であると言わなければならない。

また、従来多くの研究では、取りうる動詞の特徴の違いがテアル構文の違いに反映し、同じテアルでも多様に意味が異なるとされてきた<sup>2)</sup>。それに対し本研究では、まずはじめに「情景描写文」/「行為描写文」という種類を異にする構文があり、それぞれの構文の特性の違いが取りうる動詞の違いに反映すると考えた。このように考えることによって、先行研究では解決できなかったり、見逃されてきた問題を処理することが可能になった。

本研究は、第 2 章で先行研究の検討をし、テアル構文の研究の問題点を整理する。第 3 章では、テアル形を取る動詞と取らない動詞の選択の基準について考察する。そこでは、従来の見解のように、全てのテアル構文が同一の基準によって動詞を選択しているのではなく、テアル構文には 2 種類があって、構文ごとに別々の選択基準が適用されていることを明らかにする。第 4 章では、二つのテアル構文がどのように連続しているのかを見る。これは、従来指摘のように一元的に連続しているのではなく、二つの要素が絡み合って連続していることを明らかにする。第 5 章では、テアル構文の名詞項について考察し、従来記述に修正・加筆を加え、「格」の問題にも迫る。最後に第 6 章で本研究のまとめをし、残された課題と今後の研究の展望を述べる。以下本章では、テアル構文の分析をするに当たって、確認しておくべきことがらを 4 点論じておく。

---

1) この定義は益岡(1987:230)によるものである。

2) 森田(1977、1981、1982、1989)は、構文の違いから出発している。

## 1.2 本研究の位置付け

本研究で考察対象とする「テアル」は、一般にアスペクト形式の一つに数えられる。現代日本語動詞のアスペクトについては、金田一（1950）以後、多くの研究者によって研究が積み重ねられ、その構造が次第に明らかになってきたが<sup>1)</sup>、細部にわたる構造はまだ十分に解明しつくされたとは言えない。アスペクトを表す形式のうちテイル形については、接続する動詞の特徴やル形との対立を分析することによって、「継続相」、「結果相」などの意味的特徴が明らかにされてきた。しかし、名詞修飾をするテイル形については、寺村（1984）、金水（1994）などの研究があるものの、十分に分析されているとは言えず、「テイタ」や「テイナイ」の形になったときの分析は、ほとんど手がつけられていない。また、テイル形以外の形式、たとえば「テアル」、「テイク」、「テクル」などについては、テイル形に比べて分析が遅れており、今後これらの形式の分析を進めていかなければならない。

従来のアスペクトに関する研究は、一つ一つの形式の内的連関を解明することに重点が置かれていた。その一方で、日本語のアスペクトを表す形式の全体像の中で、各形式の占める位置を解明するまでには至っていない。先にも述べたように、テイル形の内的連関の分析から、「継続相」、「結果相」などの意味的特徴が抽出されてきた。しかし、テイル形とテアル形など、互いに形式を異にするもの同士の関係は、吉川（1973）、寺村（1984）、益岡（1987）、工藤（1991）、金水（1994）などの研究はあるものの、体系的な記述とはなっていない。その原因は、テイル形以外のアスペクト形式の研究が遅れているためである。個々のアスペクト形式の内的連関が明らかにならなければ、日本語のアスペクト表現の全体像も明らかにはならない。

最終的には、帰納的に各アスペクト形式の個別の分析から出発して、日本語の

---

1) アスペクトに関する基本的な問題点は、益岡（1987：199）に、「従来の研究において、日本語のアスペクトに関する基本的な問題の所在とそれに対する解答は、既に、大筋において示されていると言ってよいと思う。もちろん、研究者間で見解の相違がないわけではないが、主だった論点はほぼ出そろった観がある」という記述がある。

アスペクト全体を総合した研究がなされなければならないが、現段階では一つ一つのアスペクト形式の意味を分析していき、それと関連のある形式とを対比させていくのがよい。現在は、テイルの内的連関の分析が一段落し、テアルとの対比によりさらにテイルの分析を精密にする段階にある。しかし、テアルの分析が進んでいないため、両形式の対比も進んではいない。そこで、本研究は「テアル構文」の先行研究を検討し直して、より精密に分析していくことにする。

### 1.3 「内的連関」と「外的連関」

本研究での考察をするに当たって注意すべき点は、「テアル」という形式の「内的連関」と「外的連関」の両面から分析を進めることである<sup>1)</sup>。

「内的連関」とは、一つの形式の内部の意味的ありようを問題にするものである。テアル構文の場合、接続する動詞の特徴やシチュエーションなどとの関係で、多義的に異なる意味を表す。しかしまた、多義的な意味の中にも意味的なつながりがあり、全体で一つのテアルという形式の意味的特徴を形成している。このように、同一形式の内部での意味の関係を問題にするのが「内的連関」である。

一方、「外的連関」とは、他の形式との意味的ありようを問題にするものである。テアル構文でいえば、テイル、ラレテイルなど他の形式によって表される構文との対比によって、どのような意味的特徴を担っているのかが問題にされる。このように、異なる形式との関係を問題にするのが「外的連関」である。

本研究では、日本語の動詞構文を解明する一環として、テアル構文の構造を明らかにしていく。その際、テアル構文の内的連関の分析を進めていくとともに、他の形式、特にテイル構文やラレテイル構文との対比も行っていく。

### 1.4 研究の立場

ある構文の形式と意味の関係を調べる時、意味からアプローチする場合と、形式からアプローチする場合とがある。このことに関して、Comrie (1976: 10)

---

1) 「内的連関」と「外的連関」は益岡(1992: 545)の用語である。



は、意味からアプローチしていくことを提唱し、次のように述べている。

「特定の言語から独立した意味的特徴と、特定の言語に特有のカテゴリーを関係づける場合、原則的には特定の言語に特有のカテゴリーから出発したのち意味と結びつけることも可能であるし、意味的な区別から出発したのち特定の言語においてどのように文法化されているのかを調べることも可能である。（両アプローチを組み合わせることもできる。）一般言語学の観点からアスペクトを分析する場合、意味から形式へと向かう第二のアプローチの方が適切である。なぜならば、興味の中心は特定の言語に存在する特殊な形式にあるわけではないからである。」（筆者訳）

これに対し、吉川（1973：159）は、形式からのアプローチを提唱し、次のように述べている。

「松下博士の文法論は、宇宙間の現象からはじまる。そして、現象の体系に従って言語の形式を分類するという方法をとるので、言語形式の上からかなり異質のものが一つ所にまとめられることになる。また、佐久間博士は松下博士の考えを発展させたが、日本語についてだけしか考えていない。

金田一博士のように形式からおしていった場合<sup>1)</sup>、松下・佐久間両博士のように現象の把握からおしていった場合とは、どこかでクロスするはずのものであるが、その出発点は形式の方にした方が、作業がしやすいと思われる。」

さらに吉川は、『日本語教育事典』（1982：187-8）の中で、次のように述べている。

「先の方法（筆者注：現象の把握からアプローチする方法）では、問題の把握（はあく）のしかたが哲学的にすぎ、結果として一つのアスペクトのカテゴリーのところ、いろいろな言語形式が集まることになる。後の方法（筆者注：形式からアプローチする方法）では、言語形式そのものから出発する点で考察がしやすい反面、問題の形式をすべて取り上げきれないこと、考察の対象がアスペクト以外のヴォイス、ムードにまで広がってしまうなどの問題点がある。」

---

1) ただし、金田一の研究方法は、高橋（1976）や吉川（1982）が指摘するように、現象の把握からアプローチしていったと見るべきである。

このように、二つのアプローチには各々一長一短があるが、実際に分析をする場合、意味から始めるのは容易ではない。このことは外国語との対照を試みればよく分かる。たとえば、日本語の兄、姉に相当する言葉を韓国語ではそれぞれ二通りの言い方をする。弟から見て兄、姉のことをヒョン、ヌナと言い、妹から見て兄、姉のことをオッパ、オンニと言う。こういった区別は日本語の世界からはなかなか見えにくいものである。また、フランス語には主語と述語のあいだに「性・数の一致」という現象があるが、日本語にはない。日本語話者は、フランス語を通してこういった現象の存在を知ることができるのである。このように、意味からのアプローチは、最初に現象世界を意味によって区切らなければならぬため、分析が困難である。

一方、形式からのアプローチにも問題がある。たとえば、日本語の「～シヨウ」という形式には、「意志」、「推量」、「勧誘」、「申し出」などの意味がある。この違いは、動作主の人称など、形式によって区別することもできるが、これも絶対的なものとは言えず、分析者の内省によって意味的な区別をしなければならないこともある<sup>1)</sup>。アスペクトに関して言えば、吉川の述べるようにヴォイス、モダリティにまで考察対象が広がるのは分析を困難にする原因となる。しかし、コムリーや松下のように意味から出発する場合も、結局は考察対象が広がるのである。また、意味から出発するといっても、各研究者の母語や知っている言語形式を通して現象世界を見るという意味では、結局は形式からアプローチしていることになる。以上の理由から、本研究では意味的な区別も念頭に置きながら、基本的には形式の面からアプローチしていく。

## 1.5 研究の意義

従来の研究では、テアルはアスペクトを表す形式として位置付けられてきた。

---

1) 次の例文のように、多くの場合動作主の人称と意味に対応がある。

(i) 私は野球を見に行こう。(一人称：意志)

(ii) 明日は晴れよう。(三人称：推量)

(iii) 君も野球を見に行こう。(一/二人称：勧誘)

しかし、次のようにこの対応に外れる場合もある。

(iv) 私が枯れ木に花を咲かせましょう。(一人称：申し出)

(v) 彼は野球を見に行こうとしている。(三人称：意志)

しかし、工藤（1991：35）にあるように、テアルは「1つの形式に、受動性・結果性・意図性というヴォイス、アスペクト、モーダルな3側面を融合的にとらえているもの」である。次の例文の意味の違いには、ヴォイスの側面が深く関わっていると思われる。

- (1) a . ロープが切ってある。      行為者は構文的に削除されるが、意味的には行為者の意図性が含意されている。
- b . ロープが切られている。      行為者は構文的に削除されるが、意味的には含意されている。
- c . ロープが切れている。      構文的にも意味的にも行為者には触れない。

(工藤1991：34-35。下線は筆者による)

また、テオクとの関係から、モダリティの側面も無視することができない<sup>1)</sup>。特に、テアルの意味の一つにあげられている「目的」の意味は<sup>2)</sup>、モダリティの色彩が強く出ているように思われる。

- (2) a . 昨夜は十分に寝ておいたので、今日は全然眠くない。
- b . 昨夜は十分に寝てあるので、今日は全然眠くない。
- c . 昨夜は十分に寝ているので、今日は全然眠くない。

(c) が単に行為の結果の状態を表しているのに対し、(a)、(b)には動

---

1) 笠松（1993：123）は、「『しておく』は、動作にたいする、動作のし手の態度を表現しているのであって、はなし手の態度を表現しているわけではないことを、ここで強調しておく必要があるだろう。『しておく』がムードを表現する形式でないことは、あきらかである」と論じている。しかしながら、「あなたは十分寝ておきなさい」や「彼は十分寝ておいた」で、「寝る」の動作主は話し手以外の人物であるが、その行為が「～テオク」という態度で表されるものだと規定しているのは「話し手」とであると解釈される。

2) 吉川（1973）、寺村（1984）などでは「準備」と呼んでいるが、「疲れをとるために寝てある」などでは、「準備」という用語は適切ではないため、本研究では「目的」という用語を使う。

作主の「意志的な行為」であるということが強く出ている。そのため、「そのつもりもなかったのに十分に寝ている」とは言えても、「\*そのつもりもなかったのに十分に寝ておいた／ある」とは言えない。

以上のように、テアルにはアスペクトのみならず、ヴォイス、モダリティも関わってくる。そのため、テアル構文の分析は日本語のヴォイス、モダリティの解明の一助となる。また、後述するようにテアル構文の分析は、動詞の「他動性」や「意志性」を考える上でも重要な役割を果たす。現在、全ての動詞を自動詞／他動詞のいずれかに分類するという従来の二分法に変わって、プロトタイプ論から他動性を考える方法が行われるようになってきているが、その際、テアルが有効な判定基準の一つになるのである。また、「ガ-ヲ交替」といった「格」の問題にもテアル構文の分析が解決の一助となっている。さらに、テイル構文や受動文、使役文の解明にも一石を投じている。

本研究では、テアルを単にアスペクトの一つに位置付けるのみではなく、ヴォイス、モダリティとの関連も視野に入れて考察していく。このことは、テアル構文一つの研究にとどまらず、世界の諸言語の中における日本語のアスペクト、ヴォイス、モダリティのありようを体系化することにもつながる。さらに言えば、日本語から世界の諸言語に向けて、アスペクト、ヴォイス、モダリティの概念に新しい見地を与えることにもなるであろう。

## 第 2 章 先行研究

### 2.1 テアル構文の位置付け

テアル構文に関する先行研究を検討するに当たって、次の点を明らかにしておく。

- 【1】テアルをめぐる研究にはどのようなものがあったか
- 【2】諸研究の議論はどのようなアプローチでなされたか
- 【3】諸研究はテアルをどのように位置付けているか
- 【4】これまでに明らかになった部分と検討の余地のある部分はどこか

テアル構文に関する体系的な研究は吉川（1973）に始まる。それ以前にもテアル構文に関する記述はあったが、テイル構文の付録のような形で示されるのみで、テアル構文の全体像を解明するものではない<sup>1)</sup>。

また、テアル構文とテイル構文の歴史的な変遷を調べたものに、野村（1969）、坪井（1976）がある。野村は江戸時代後期から昭和30年代までの、坪井は江戸時代の文学作品などを資料にして、統計処理によりその消長を探ろうとした。両者とも単に出現数を数え上げただけで、統計の方法に疑問があり、野村自身の言葉にあるように、「それほど、意味のある数字とは考えにくい」（p.161）というような部分もある。しかし、現代にはない用法が以前にはあったことが示されており<sup>2)</sup>、現代語の方言差を研究するのにも有益な情報を与えている。

テアル構文の体系的な記述を試みた研究には、吉川（1973）、寺村（1984）、益岡（1987）がある。これら三者は、それぞれ違った角度からアプローチを行っているという点で、テアル構文をさまざまな側面から見ることを可能にしている。

---

1) 松下（1924）、金田一（1955）、高橋（1969）、渡辺（1969）などがある。  
2) 坪井（1976：540）には、自動詞にテアルのつく例があげられている。  
（i）着る物の数は揃ふて有、あらたむるに及ばぬ（心中天の網島 中の巻）  
（ii）なんぼも湧てある湯ぢやはい。（浮世風呂 四編巻の下）  
これらは現代語では非文であり、通常テイル形で表わされる。

各研究のアプローチの仕方を簡単に述べると、吉川は、テアルに接続する動詞の特徴に注目し、テアルの内部を五つの意味に分類することに視点を置いた。寺村は、テアル構文の外的連関に着目し、テイル構文やラレテイル構文との意味の相違を探ることに重きを置いた。益岡は、吉川と同様にテアル構文の内的連関を記述したものであるが、吉川ではほとんど論じられなかった「～ガ～テアル」と「～ヲ～テアル」の違いから、テアル構文の意味領域を追究した<sup>1)</sup>。以下本章では、三つの研究を検討し、テアル構文の研究に残された問題点を確認する。

## 2.2 吉川武時の研究とその問題点

### 2.2.1 吉川の研究

吉川の研究は、高橋(1969)に負うところが大きいので、吉川の研究を検討する前に、簡単に高橋の研究を見ることにする<sup>2)</sup>。

高橋(1969)は、テアルの意味を「対象に変化を生ずるうごきがおわったあと、その対象を主語にして、結果の状態を述語としてあらわしたものである」と定義し、その使用のされ方によって以下の三種類に分類した。

( i ) 目に見えるような形での状態を表す

( 3 ) ( 87 )<sup>3)</sup> 春琴女の墓の右わきに一ともの松がうえてあり(谷崎潤一郎「春琴抄」)

( ii ) 放任の状態を表す

( 4 ) ( 89 ) その仕事はかれにまかせてあります。

( iii ) 準備のできた状態を表す

- 
- 1) 「意味領域」は益岡(1987:219)の用語で、この場合「テアル表現が表す意味の総体」を指す。
  - 2) 吉川(1973)の研究方法は、高橋(1976:349)に、「吉川は、アスペクトの概念をまず佐久間、金田一にもとめ、そこから出発するが、研究のすすめかたは、鈴木——高橋からうけついで帰納的な方法をとる」とあるように、アスペクトを形式の面から帰納的に分析している。
  - 3) 例文番号が二つある場合、左側は本研究での通し番号を、右側は引用文献に付されている番号を表す。

( 5 ) ( 92 ) 女中にまで口どめしてある。( 志賀直哉「暗夜行路」)

( 高橋1969 : 129 )

しかし、分類基準が主観的で、なぜそのような分類になるのか客観的な根拠が示されていない。テアル形になる動詞の特徴については、「対象に変化を生ずる他動詞である。また、意志的な動作をあらわす動詞にかぎる」と述べる一方、( iii ) の場合、「自動詞がつかわれることがある」とも述べ矛盾がある。その上、なぜこうした動詞の使用制約があるのかについても論じられていない。

その他、「テアル」、「テイル」、「ラレテイル」の相違、「～ガ～テアル」と「～ヲ～テアル」の相違、「ラレテアル」の使用についても触れている。しかし、例文が並んでいるだけで、どう違うのかという説明はない。

結局、高橋はテアルの意味を恣意的に3つに分類したにすぎず、テアル構文の分析に不可欠な「～ガ～テアル」と「～ヲ～テアル」の相違には論及せずに終わっている。

この高橋の3分類を継承して、より細かく分類したのが吉川(1973)である。吉川はテアルの意味を次の5種類に分類している。

( i ) 対象の位置が変化した結果の状態を表す

( 6 ) 炉に炭火がいれてある。( 新藤兼人「傷だらけの山河」)

( ii ) 対象が変化した結果の状態を表す

( 7 ) わたしの家は、ひとに貸してある。( 光村図書1965「小学新国語六年下」)

( iii ) 動作が終わったことを表す

( 8 ) アパートを建てるということは十カ月も前に発表してある。( 新藤兼人「傷だらけの山河」)

( iv ) 放任を表す

( 9 ) 机の上には、読みさしの本をひらきっぱなしにしてある。( 安部公房「砂の女」)

( v ) 準備のためにした動作を表す

( ii ) から派生したもの

(10) あついくにのどうぶつは、さむさによわいので、へやをあたたかく  
してあります。(光村図書1968「小学新国語一年下」)

(iii) から派生したもの

(11) 燃料も用意してあるぞ。(須崎勝弥「キスカ」)

(吉川1973: 257)

上の5種類の分類基準は以下のとおりである。

(i) テアル形が空間的存在様式を表す動詞〔+ loc, + ext〕(「置く」など) に後接する場合。(loc = location 空間的位置に関する動詞、ext = existence 動作の結果の対象の存否。)

対象は「が」で表されるものが圧倒的に多く、本動詞を省いて

炉に炭火が ある。

とも言えるため、最も本動詞に近い「ある」の意味が働いているとすることができる。

(ii) テアル形が対象を変化させることを表す動詞〔+ t, + ch〕に後続する場合。(t = transitive 他動詞、ch = change 対象を変化させることを表す動詞<sup>1)</sup>。)  
この特徴を持つ動詞には「かわかす」の類と「なおす」の類があるが、「なおす」の類はこの意味にはならず、次の(iii)の意味になり、「かわかす」の類はこの意味になる場合と、(iii)の意味になる場合とがある。

(iii) 上の「なおす」の類。他動詞のみならずある種の自動詞からも作られる。

(iv) 「放任」とは、対象に働きかけないで一定の状態をそのままにすることを表す。「ほうる、うっちゃる、~ままにする」のような放任動詞が用いられる。吉川は、「独自の項目としてたてることができるのかどうか疑問である。『しておく』との関連において、これを考えるが、後にもう一度検討する」と述べている。

(v) (ii)、(iii)の意味からこの意味が派生する。

(ii) から派生したもの。「(時間)まで」という語で規定される。

---

1) 吉川は、主体の変化を表す「変化動詞」も〔+ ch〕という記号で表している。



( iii ) から派生したもの。「( 時間 ) までに」という語で規定される<sup>1)</sup>。

「準備的意味」が強く表れるための条件として、次の三つをあげている。

〔 1 〕 語彙的条件

語彙そのものが準備的意味を持つ場合

例 「用意する」

〔 2 〕 構文的条件

目的を示す「～ように」という句がある場合

〔 3 〕 その他

「ちゃんと」「～を考えて」などの文脈による場合

また、吉川は「この意味の場合には、対象語があらわれないものもかなり見られる」と指摘している。

吉川は以上の 5 つの意味のうち、( i ) と ( ii ) が基本的であるとして次のように論じている。

「結果の状態をあらわす点において『している』の( ii )と同じである<sup>2)</sup>。

ことなるのは、『している』が主体の状態をあらわすのに対して、『してある』が対象の状態をあらわすという点である。したがって、両者の関係はボイス的である。『かける - かかる』のような、自他の対応のあるもの、あるいは、『かけられる』のような受け身になったものは、それぞれ次のような形式で同じことをあらわす。

かべになわがかけてある。(他動詞の『してある』の形)

かべになわがかかっている。(自動詞の『している』の形)

かべになわがかけられている。(他動詞の受身の『している』の形)

『してある』という形は、他動詞からつくられる。しかも、これは、人間の動作をあらわすものに限られる。」

さらに吉川は、

---

1) 吉川(1982)では、「まで」と「までに」の両方によって規定される動詞を「設置動詞」、「までに」のみによって規定される動詞を「処置動詞」と呼んでいる。詳しくは 4 . 2 . 1 で論じる。

2) 吉川(1973)はテイル形の意味を 5 種類に分類した。そのうちの「( ii ) 動作・作用の結果の状態」を指す。

「( i ) と ( ii ) とを分けたのは新しい試みである。( i ) と ( ii ) とはアスペクト的には上に見たように同じ扱いができるが、この中から、( i ) として、空間的存在様式をあらわす動詞を分離し、独立させた。これは、純粹に意味的に見た場合、『ある』が本動詞、つまり存在をあらわす動詞であると考えられるからである。」

と論じ、( i ) と ( ii ) になる動詞は、「たもつ、つなく、うえる、たてる」のように、対象に働きかけてそれを持続させることを表す動詞であるとしている。

吉川は、( iii ) については次のように論じている。

「動作がすでに行なわれたことをあらわす『してある』は、『している』の( iv ) の『経験』と似ている。純粹にこの意味になるものは少なく、多少とも後に述べる準備の意味を帯びる。( iii ) になる動詞は、対象に働きかけてそれを変化させることをあらわす動詞である。この中には( i ) や( ii ) になる動詞の他、『用意する、うつ、なおす』のように変化させるだけで結果の持続には関与しない動詞も含まれる。

例 八時までに戸があけてあった。

八時までにつくってあった。

(なお、『八時まで戸をあけてあった。』の場合は( ii ) である。)

その他、吉川は次の二点を問題点としてあげている。

〔 1 〕受け身に「てある」がつくものは、「準備的」の意味にはならない。

( 12 ) 体育の時間らしく、机の上に脱いだ学生服などが置かれてある。

(佐治乾、河辺和夫「非行少年」)(吉川1973: 264)

〔 2 〕「～が～てある」か「～を～てある」かについては、はっきりしたことは言えない。「してある」全般にわたって、「が」をとることが多く( ii ) から派生したもののうちに、比較的多く「を」をとるものを見いだすにすぎない、とだけ言える。

しかし、これらについての詳しい考察はされていない。

以上のように吉川はテアル形の基本的な意味を、「動作の終わった後の結果の状態」であるとした。また、それとは別に「動作が終わったことを表す」という

意味があるとした。そして、これらの意味の違いには動詞の性質が関わっていることを示唆している。さらに、この二つの意味から語彙的条件や構文的条件によって「準備のためにした動作」という意味が派生してくるとした。吉川は「放任」の意味については項目を立ててはいるが、自分自身この項目を立てる必要性に疑問を抱いている。しかし、どこに疑問を抱いているのかは述べられていない。

## 2.2.2 吉川の問題点

吉川の研究は以上のものであるが、その問題点として次の諸点があげられる。

### 〔A〕テアル形内部の意味分類に関して

1. 吉川は、(iv)「放任」という項目を立てているが、「放任」はテアルに備わった意味ではなく、たとえば「開きっ放し」のように、動詞自体に備わっている意味である。そのため、「放任」という項目を立てる必要はない。
2. 「目的」(吉川の用語では、(v)「準備」)という意味になる条件は、吉川のあげた条件だけで十分であろうか。次の二つの文を比較してみよう。

(13) a. 黒板に字が書いてある。

b. 窓があけてある。

(a)はシチュエーションによって、「連絡事項を知らせるため」などの「目的」の意味が入る場合もあれば、「黒板に字が書かれている」という情景を描写するだけで、特に「目的」という意味の入らない場合もある。しかし、(b)は常に「空気の入れ替えのため」などの「目的」の意味がともなう。「目的」という意味がともなわない場合は、「窓があいている」と言うはずである。(b)の場合、吉川のいう語彙的条件も構文的条件も満たしていないのに、なぜ常に「目的」という意味をともなうのか。また、(a)の場合はなぜそうならないのか。そして(a)と(b)の違いも明らかにされなければならない。

### 〔B〕接続する動詞に関して

1. 吉川は、(ii)は「マデ」によって規定され、(iii)は「マデニ」によって規定されるとしている。しかし、4.2.1で考察するように、この規定は有効なものではない。

2. 吉川は、「『してある』という形は、他動詞からつくられる。しかも、これは、人間の動作をあらゆるものに限られる」としながら、(iii)の場合、「他動詞のみならずある種の自動詞からもつくられる」としている。これをどう説明するのか。また、「ある種の自動詞」とはどんな自動詞で、なぜこれらの自動詞にはテアルが接続するのかが不明である。この点に関しては高橋(1969)から一步も進んでいない。

〔C〕格に関して

1. 「～ガ～テアル」と「～ヲ～テアル」の違いについて分析されなければならない。

〔D〕他の形式との相違に関して

1. テイル形とテアル形の相違をヴォイスの違いとして捉え、テイル形が主体の状態を表すのに対して、テアル形が対象の状態を表すとしている。両者にヴォイス的な側面が見られることは確かである。しかし、次の例文の場合、焦点は対象の状態変化だけではなく、動作主の行った行為の結果にもある。

(14) 村山首相はすでに青島議員の質問に答えてある。

(14)は、対象である「質問」に「回答された」という状態変化が生じたとも、動作主の行為が「回答していない」という状態から「回答した」という状態に変化したとも解釈できる。

2. 受け身に「テアル」がつく場合について分析されなければならない。

要するに、吉川はテアル構文の分析に不可欠な「～ガ～テアル」と「～ヲ～テアル」の相違にまで論及せずに終わっているため、テアル構文が解明される方向には進んでいないのである。

## 2.3 寺村秀夫の研究とその問題点

### 2.3.1 寺村の研究

寺村は、テアル形の意味を、「～テイルと同じように、過去に実現したことの結果として現在の状態を述べる言いかたに、～テアルがある。～テイルとちがう

ところは、その現状が誰か人の行為によってもたらされたものだと見立てている点である」として、次の例をあげている。（引用例文は寺村（1984）から。下線は筆者による）

～テイルと同様、眼前の状態を描写する場合

(15) (81) 壁ニ絵ガカケテアル

(16) (82) 床ノ間ニ花ガ活ケテアッタ

現在の状況を述べる場合

(17) (83) 先方ニハモウソノコトヲ話シテアリマス

(18) (84) マダ予約シテアリマセンガ、大丈夫デス

また、寺村は「～テイルが一般的な既然の結果の状態をいうのに対して、～テアルは、人が何かに対して働きかける動作、行為の既然の結果の存在をいう点が特殊であるが、そのため、動詞の自他が形態的に対応している場合、自動詞の～テイル形、対応する他動詞の～テアル形、および、その他動詞の受動体の形の使い分けが問題になる」として、次の例をあげている。

(19) (85) チューブの中には、酸化剤が 入っている。

(自動詞のテイル形)

入れてある。

(他動詞のテアル形)

入れられている。

(他動詞の受動体)

(20) (86) (学生たちが教室に入ろうとしたが、ドアがあかない。そこへやってきた先生に言うのに、)

a . ドアニカギガカケラレテイマス

b . ドアニカギガカケテアリマス

c . ドアニカギガカッテイマス

(19)は(ほとんど)意味を変えずに入れ替え可能である。しかし寺村は、(20)のように、「どれも‘文法的には’正しいが、日本人がこの場面でふつうに言うのはc。」であり、(ほとんど)意味を変えずに入れ替えることができない場合もあると指摘している。

その上で寺村は、「自他の形態的な対立のある動詞の、この三つの選択の基準」をあげている。その箇所をまとめると次のようになる。(A・aの符号は筆者による)

#### 原則

(A)その眼前の状態が、何らかの外部からの力、作用によってもたらされたものであると捉えられた場合

a.外部からの力、作用が、人が意図をもってした作為であると捉えた場合

~テアル

b.そうでない場合(自然の力、非意図的な人の動作の場合)

~ラレテイル

(B)自然にそのようがあると捉えられた場合

~テイル

#### 選択に関わるその他の要素

(イ)その自動詞の表す動作・行為の仕手、他動詞の表す動作・行為の対象が生きもの、特に人であるか、物であるか

(ロ)自他の対立の自が、他の作用の結果の現象であるという性格のものか

(ハ)描こうとする事態が、尋常な状態か異常な状態か

#### 1.(イ)に関する例

(21)(87) 宝クジノ売場ニタクサンノ人ガ 並ンデイル

\* 並ベテアル

\* 並ベラレテイル

(22) (88) 店先ニキレイナ干シイカガ 並ンデイル  
並ベテアル  
並ベラレテイル

(21) のように「並ぶ」主体が人のときはテイルのみしか使えないのに対し、  
(22) のようにそれが物の場合には相互に入れ替えが可能である。

## 2. (口)に関する例

(23) (91) 横二細長イ四角ナ<sup>れんじ</sup>櫺子窓ガニツ 並ンデイタ  
(92) \* 並ベテアッタ  
\* 並ベラレテイタ

「並ぶ」主体の窓は物なので、(イ)の(22)と同じように、三つの形は相互に入れ替え可能なはずである。しかし、窓の形、配置を見るがままに形容した言い方の場合、テイル形を使うのが自然である。このテイルは「形容詞的動詞」のテイル(寺村1984:137)である。だから、その背後に人の作為を考えることが不自然なのである。

## 3. (ハ)に関する例

(24) (93) a. オヤ、アソコニオ金ガ落ちテイル  
b. \*オヤ、アソコニオ金ガ落トシテアル  
(25) (94) a. 金魚ガ死ンデイル  
b. 金魚ガ殺サレテイル  
c. ?金魚ガ殺シテアル  
(26) (95) a. 金網ガヤブレテイル  
b. 金網ガヤブラレテイル  
c. 金網ガヤブッテアル  
(27) (96) a. 高速道路ノアチコチデ、野ウサギガハネラレテイル

(28) (97) b . \* 高速道路ノアチコチデ、野ウサギガハネテアル

(八)に関して寺村は「微妙な要素であるが」と断りながら、「瞬間動詞の～テイルが、あたりまえでない事態の発見の報告に使われることが多いのに対し、～テアルは——何の意図が分からないが人がある意図でしたことの結果だと見られるという意味で、——尋常な状態で使われるのがふつうだ」としている。

寺村はテアル形のアスペクト的意味を「処置の結果の存在」とした。そしてさらにそれを次のように二つに分類した。

[ 1 ] その処置行為の主体が不明または不問のまま、眼前の状態をそのように客観的に描く場合 (15) (16)

・ある目的のための準備という意味合いは、ある場合もあるが、ない場合のほうが多いようである。

[ 2 ] 処置が自分自身の行為、または自分の差配による誰かの行為である場合 (17) (18)

・その処置が、あることに対する準備という意味が強くなる。その場合、処置の対象が、「～ガ」でなく「～ヲ」になることが多い。

さらに、「記述」を表す動詞のテアル形は、意図的処置という感じがほとんどないということを指摘している。

例 書いてある、署名してある

また寺村は、「このような「～ニ……ト書イテアル」は、「ト書カレテイル」とほぼ同じ意味だといってよさそうである。短く「……トアル」というのと変わらない」とも指摘している。

(29) (99) 題名の下には(五十四回)とあった。

最後に、ラレテアル形について簡単に触れている。寺村は、「〔他動詞〕～テアルは、上のように、基本的には～ラレテイル、～テイルと対立してその表現機能をうけもっているのだから、その他動詞の受身形が～テアルとなるはずは(理屈からいうと)ないわけだが、実際には小説などでわりによく見かける」、「～



サレテアルは、～サレテイルと意味的にはほとんど同じであり、～テアルがもつ意図的な処置の既然の結果という性質はないといってよいと思う」と述べている。

以上のように寺村は、テアル形の意味を「処置の結果の存在」を表すこととした。そして、その処置が自分自身の行為、または自分の差配による誰かの行為である場合には、あることに対する「準備」という意味が強くなるとしている。

吉川の分析では、動詞の種類を分類することによって、テアルの意味を分類することに重点が置かれていた。一方、寺村の分析の特徴は、テイル、テアル、ラレテイルの三つの形式を比較することによって、テアルの意味を分析しようとしたところにある。

### 2.3.2 寺村の問題点

寺村の研究は以上のようなものであるが、その問題点として次の諸点があげられる。

#### 〔A〕テアル形内部の意味分類に関して

1. [ 1 : 眼前の状態を描写する場合 ] には、「目的」（寺村の用語では「準備」）の意味が入るときも入らないときもあるが、[ 2 : 処置が自分自身の行為の場合 ] は「目的」の意味が強くなるとしている。（15）～（18）の例文を見ると、たしかにそのような傾向がある。なぜ [ 1 ]、[ 2 ] にそのような違いがあるのか分析されなければならない。

#### 〔B〕接続する動詞に関して

1. 自 / 他の対立のない動詞についてはほとんど言及されていない。これらの動詞のテアル形の意味は、自 / 他の対立のある動詞と比べてどうなのか分析されなければならない。

自動詞のみ： 寝る、走る、光る...

他動詞のみ： 置く、書く、読む...

#### 〔C〕格に関して

1. 処置の対象がガ格になるときと、ヲ格になるときの違いが分析されなければならない。

#### 〔D〕他の形式との相違に関して

1. 寺村は、自 / 他の形態的な対立のある動詞の、テイル、テアル、ラレテイルの「選択の基準」をあげている。しかし、その基準は妥当なものであろうか。たとえば、原則 (A b) によると、ラレテイルは「自然の力、非意図的な人の動作の場合」となっているが、(19)の「入れられている」には明らかに人の意図が感じられる。このような反例があがる以上、「選択の基準」の再検討がされなければならない。
2. ラレテアル形について寺村は、「〔他動詞〕～テアルは、上のように、基本的には～ラレテイル、～テイルと対立してその表現機能をうけもっているのだから、その他動詞の受身形が～テアルとなるはずは（理屈からいうと）ないわけだが、実際には小説などでわりによく見かける」と論じている。それではなぜ、「理屈に合わない」はずなのに、実際にはラレテアルという形式が使われるのか説明されなければならない。
3. 寺村は、テアルの意味を「～テイルとちがうところは、その現状が誰か人の行為によってもたらされたものだ」と見立てている点である」と論じている。たしかに(30)の場合、対応する自動詞のテイル形と比較してみると、そのような印象を受ける。

(30) a. 壁にルーベンスの絵がかけてある。(他動詞+テアル)

b. 壁にルーベンスの絵がかかっている。(自動詞+テイル)

(a)は、壁に絵を掛けた人物は「不明」あるいは「不問」にされているが、壁に絵を掛けた人物の存在は感じられるのである。

しかし(31)の例では、その処置行為の主体が「不明・不問」であるという以前に、そのような人物の存在が感じられない。

(31) よくよく見てみると、何か文字らしきものが書いてあった。

この点についても説明されなければならない。

要するに、無対動詞の考察がなされていないこと、テイル、テアル、ラレテイルの選択の基準に反例が見つかることに寺村の問題点がある。

## 2.4 益岡隆志の研究とその問題点

## 2.4.1 益岡の研究

益岡（1987）は、益岡（1984）に若干の手直しを加えたものであるが、ほとんど相違はない。また、益岡（1992）はテアルとテオクとの関係について述べているが、テアルの意味については益岡（1987）をそのまま踏襲している。益岡の研究のアプローチは「～ガ～テアル」、「～ヲ～テアル」の違いがどこにあるのかを探るところから出発している。益岡は、テアル表現全体に共通して認められる意味的特徴を「意志的行為の結果に重点が置かれる『結果相』の表現」とした。その上で、テアル表現の意味領域の内部のありようを明らかにするために、A<sub>1</sub>型～B<sub>2</sub>型の4つの型に分類した。以下、各型の特徴を益岡（1987）から取り出して列挙する。（引用例文は益岡（1987）から。下線は筆者による）

テアル表現は統語的観点から、次のA型とB型の二つの型に分類される。

A型（受動型）：

意志的行為の結果生じる、対象の存在その他の状態が、視覚でとらえられる形で存続していることを記述するタイプの文

(32)(2) 崩した古材や板が積み上げてあった。（松本清張「投影」）

〔特徴〕

1. ガ格には「対象」の役割を担う名詞句が来る。
2. ガ格に現れる典型的な名詞は非情名詞である。ただし、次の例のように非情名詞でない場合もある。

(33)(10) 馬が放ってある。

(34)(11) 犬が鎖につないである。

(35)(12) ? 人が鎖につないである。

(36)(13) ? 生徒が廊下に立たせてある。

3. 「動作主」は抑制され、一般に表面には現れない。

(37)(3) ? 崩した古材や板が従業員によって積み上げてあった。

4. 受動表現と共通する面がある。

5. 受動文の場合、テ形に接続する形式としては、一般にイルが用いられる。

(38)(4) 崩した古材や板が積み上げられていた。

A<sub>1</sub>型:

行為の結果もたらされる、対象の或る場所での存在を描写するタイプの表現

(39)(6) 飲みかけのコーヒー茶碗が、受け皿から離れて置いてある。

(高橋三千綱「五月の傾斜」)

(40)(7) 盆栽が幾鉢かならべてあった。(松本清張「張込み」)

〔特徴〕

1. 広義の存在表現の一種。もっぱら対象の結果状態に焦点が置かれ、その状態をもたらしした行為自体は二義的な意味しか持たない。存在動詞アルの性格を強く反映している<sup>1)</sup>。

2. 関与する動詞は「配置動詞」とでも呼ぶべき他動詞が中心となる。

例 置く、並べる、飾る、乗せる、掛ける、貼る、敷く、止める

3. 「動詞受動形+アル」の形式が許容される。

(41)(22) 額にはいった四人の写真が飾られてあった。(石井代蔵「天下盗り狼」)

A<sub>2</sub>型:

或る行為の結果もたらされる、対象の何らかの状態が、視覚可能な形で存続していることを描写するタイプの表現

(42)(8) 新聞紙の半分ぐらいをさらに四つに切ったぐらいの切り抜きが折ってあった。(松本清張「地方紙を買う女」)

(43)(9) それか、いつの間にか磨いてあるのに気づいた。(柴田翔「立ち盡す明日」)

---

1) 益岡(1992)に存在動詞のアルとテアルの関係についての記述がある。

〔特徴〕

1. 関与する動詞は、対象が何らかの状態変化を起こし、その結果の状態が視覚可能な形で存続することを表す、「状態変化動詞」とでも呼ぶべき他動詞。

例 磨く、折る、開ける、消す、洗う、あたためる、灯ける、揃える

2. 「動詞受動形+アル」の形式は、抵抗感を伴う、不自然な表現である。

例 \*磨かれてある、\*折られてある、\*開けられてある、\*消されてある

このことに関して益岡は、「A<sub>1</sub>型以外では、テ形に接続するアルが『存在』の意味を反映する度合いは低く、それゆえ、『動詞受動形+イル』という形式の代りに『動詞受動形+アル』という形式を用いる理由が、見出し難いのであろう」と論じている。

B型（能動型）：

動作主が引き起こした行為の結果もたらされる事態が何らかの意味で基準時<sup>1)</sup>に関与するというタイプの文

(44)(5) 水曜日はお勤めが休みだと聞いたから、私は一日中、身をあけてあるのだよ。(柴田翔「立ち盡す明日」)

〔特徴〕

1. ガ格には「動作主」が来る。(潜在化する場合もある。)
2. 受動表現的性格は見られない。

B<sub>1</sub>型：

行為の結果もたらされる、対象の何らかの状態が、基準時において引き続き存在しているという、「結果の事態の存続」の意味が表される

---

1) 益岡(1987)には「基準時」という用語が何を指しているのか説明がない。(45)、(46)、(50)、(51)の例では、単に「現在時」とされているだけである。

(45) (23) 業行は自分が写した経巻類をまだ相当量各地の寺々に預けて  
あり……。 (井上靖「天平の曇」)

(46) (24) 7、8人っていても、ベストメンバーを選んであるんだぜ。  
(三田誠広「やがて笛が鳴り、僕らの青春は終わる」)

〔特徴〕

1. 「対象指向性」 (= 対象の状態存続が問題となる性質) がある。この点で、A型と類似している。ただし、A型における対象の状態存続が、言わば、前面に押し出されるのに対して、B<sub>1</sub>型における対象の状態存続は背景化され、ガ格の位置には動作主が立つ。
2. 関与する動詞は、所与の行為が対象の何らかの状態の存続を導き出す「状態存続動詞」とでも呼ぶべき動詞に限られる。A型で取り上げた、「配置動詞」と「状態変化動詞」も「状態存続動詞」に含まれるので、B<sub>1</sub>型のテアル表現としても用いることができる。
3. B<sub>2</sub>型よりも受動表現になりやすい。

(47) (34) ベストメンバーが選ばれている。

4. 「対象指向性」があるので、何らかの動機があれば、対象指向性を明示することが可能である。すなわち、対象をガ格で表すことによって、これに焦点を置くことができる。

(48) (42) 7、8人っていても、ベストメンバーが選んであるんだぜ。

5. 「行為指向性」(B<sub>2</sub>型の項参照)がB<sub>2</sub>型よりも弱い。よって、時の副詞の生起を許容しにくい。

(49) (54) ? 7、8人っていても、昨日ベストメンバーを選んであるんだぜ。

B<sub>2</sub>型：

単に、行為の結果が基準時(及び、それ以降)において何らかの有効性を示す、という意味での結果相を表す。対象の何らかの状態がその時点で存続している、といったことは、問題にされていない

(50)(25) 笠井は、これまでに、チョコレートに入れて、金の指輪や、ネックレス、ブレスレットなどを、彼女に贈ってある。(山村美紗「殺意の河」)

(51)(26) もちろん、天王山にむけてそれぞれの調整を指示してあります。(報知新聞1983.7.24)

〔特徴〕

1. 「対象指向性」という特徴は認められない。
2. 関与する動詞は、「基準時における有効性」を示すものであればよく、次のように自動詞であってもかまわない。

(52)(32) 夜ばかり続く冬の間に寝だめしてあるのかと思うほどだ。

(本多勝一「カナダ・エスキモー」)

3. 受動化は、テアル表現に対して、対象をガ格に置くことで対象の状態存続を明示化する、という「対象指向の明示化」の働きをするので、受動化は対象指向性を持たない表現には適用し難い。

(53)(38) ?天王山へ向けてそれぞれの調整が指示されている。

4. 「対象指向性」がないので、対象をガ格で表すことによって対象指向性を明示化する必要がない。

(54)(46)(?) もちろん、天王山にむけてそれぞれの調整が指示してあります。

5. 「行為指向性」がある。すなわち、 $B_2$ 型は、行為の結果(行為の結果の基準時での有効性)が問題にされるだけでなく、行為事態にも或る程度、重きが置かれる。この主張を裏付けるものとして、時の副詞の生起可能性があげられる。もし時の副詞が生起するなら、そのテアル表現は、行為の結果のみならず、行為事態にも一定の関心を向けているといえることができる。

(55)(50) もちろん、昨夜、天王山にむけてそれぞれの調整を指示してあります。

益岡は、テアルの意味を以上の四つに分類した上で、「テアル表現の全体像は、 $A_1$ 型から、 $A_2$ 型、 $B_1$ 型を経て $B_2$ 型に至る、1つの連続体を構成している」と

している。その連続している様子を分かりやすいように図示しておく。

	A <sub>1</sub> 型	A <sub>2</sub> 型	B <sub>1</sub> 型	B <sub>2</sub> 型
結果性	具体的	-----	-----	抽象的
ガ格	対象	-----	-----	動作主
対象指向性	強い	----- (背景化) -----	-----	ない
行為指向性	弱い	-----	-----	強い
受動的性格	強い	-----	-----	弱い
ラレテアル	許容	-----	-----	不自然
動詞	配置動詞	状態変化動詞	状態存続動詞	基準時における 有効性を示す動詞 (自動詞でもよい)

[ 図 2 - 1 ]

以上のように益岡はテアル表現全体に共通して見られる意味的特徴を、「意志的行為の結果に重点が置かれる『結果相』の表現」とした。しかし、「結果相」という点では共通しているものの、その内容は「対象の存在」といった具体的なものから、「行為の結果の基準時における有効性」といった抽象的なものまである。益岡はそのような「結果性」の内部のありようを明確にするために、「対象指向性」と「行為指向性」という二つの概念を持ち出し、その指向性の強弱によってテアルの意味をA<sub>1</sub>型～B<sub>2</sub>型の四つの型に分類した。

#### 2.4.2 益岡の問題点

益岡の研究は以上のようなものであるが、その問題点として次の諸点があげられる。

〔A〕テアル形内部の意味分類に関して

1. 益岡はA<sub>1</sub>型～B<sub>2</sub>型の全てに「意志的行為」という意味があるとしているが、「アッ、弁当が忘れてある」のようにテアルが「無意志」の行為を表すことがある。

〔B〕接続する動詞に関して



1. 自動詞でも、基準時における有効性を示すものならテアル形になるとしているが、そのような自動詞とそうでない自動詞との意味的・統語的違いを明確にしなければならない。
2. 他動詞でもテアル形にならないものがある。これについては言及されていないが、このような動詞についても分析されなければならない。

例 知る、間違える、信じる……

#### 〔C〕格に関して

1. 益岡は「～ガ～テアル」のガ格に「対象」が来る場合をA型、「動作主」が来る場合をB型としているが、このように、ガ格に来る名詞が担っている意味役割によって、テアルの意味に違いがあるとする分析方法には賛成できる。しかし益岡は、なぜ同じガ格が一方では「対象」になり他方では「動作主」になるのかという疑問には答えていない。
2. A型で、ガ格に現れる典型的な名詞は「非情名詞」だと言っているが、なぜ非情名詞が多いのか分析されなければならない。
3. A型で、「動作主」が抑制されると言っているが、なぜ抑制されるのか分析されなければならない。
4. 「～ト/ニ/～テアル」に関しての分析がなされていない。

#### 〔D〕他の形式との相違に関して

1. 益岡は、A型のテアル表現は受動表現と共通するとしている。しかし、テアルとラレテイルの意味が全く同じだということはない。たとえば、「ケーキが食べてある」に比べて「ケーキが食べられている」には「被害」の意味が強く表れている。両形式の相違を明らかにしなければならない。

要するに、益岡の問題点は、「無意志」のテアル構文を見逃していたことと、「～ト/ニ/～テアル」の分析がなされていないところにある。

## 2.5 先行研究の問題点の整理と本研究の分析の視点

### 2.5.1 先行研究の問題点の整理

先行研究の検討により、2.1 にあげた【1】～【4】の諸点が明らかになったので、ここで整理しておくことにする。（【1】は省略）

【2】諸研究の議論はどのようなアプローチでなされたか

吉川： テアルに接続する動詞の意味的特徴によってテアルの意味を分類した

寺村： テイル、ラレテイルとの使い分けを調べることによってテアルの意味を分析した

益岡： 「～ガ～テアル」と「～ヲ～テアル」の違いからテアルの意味を分類した

【3】諸研究はテアルをどのように位置付けているか

吉川： 「動作の終わった後の結果の状態」、「動作が終わったことを表す」、「放任」、「準備」

寺村： 「人が何かに対して働きかける動作、行為の既然の結果の存在」

益岡： 「意志的行為の結果に重点が置かれる『結果相』の表現」

【4】これまでに明らかになった部分と検討の余地のある部分はどこか

〔A〕テアル形内部の意味分類に関して

テアル形になる動詞の性質を分析することによって、テアル形内部の意味分類ができる。吉川と益岡は異なる方法によって分析を進めたが、その結果には完全にではないが対応するところがある<sup>1)</sup>。しかし、両研究ともこれこれの動詞のときはこういう意味になるとしか記述していない。ただ、益岡の「対象指向性」、「行為指向性」という概念は動詞の他動性との関係で参考になる。これに関して本研究では、第3、4章で動詞の「影響性」と「意志性」が関与していることを示す。

従来、「目的」の意味が強くなる条件として、様々な要因が指摘されているが、本研究の第5章ではその点について新たな要因を提示する。

〔B〕接続する動詞に関して

テアル形になる動詞は「他動詞と一部の自動詞」とされている。一部の

---

1) 吉川の分類した意味(i)は益岡のA<sub>1</sub>に、(ii)はA<sub>2</sub>に、(iii)はB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>に対応する。

自動詞を益岡は「基準時における有効性を示す動詞」としているが、本研究ではこれをより具体的に「意志動詞」と規定する。詳細は第3章で扱う。

#### 〔C〕格に関して

「～ガ～テアル」、「～ヲ～テアル」の区別が問題になっている。寺村は、対象が「ガ格」になる場合と「ヲ格」になる場合とがあるが、処置が自分自身の行為の場合「～ヲ」になると論じている。また、益岡はガ格に「対象」が来る場合と「動作主」が来る場合とがあると論じている。しかし両研究とも、なぜそうなるのかまでは論及されていない。その他、益岡のA型で、ガ格に現れる典型的な名詞は「非情名詞」で、かつ「動作主」は抑制されると論じられているが、これもなぜそうなるのかまでは論及されていない。本研究の第4、5章では、これらの現象を「情景描写文」と「行為描写文」の違いに求める。

#### 〔D〕他の形式との相違に関して

寺村は、自/他の形態的な対立のある動詞の、テイル、テアル、ラレテイルの「選択の基準」をいくつかあげているが、反例がいくつもあがってくる。この3者の選択の基準は様々な要素が入り交じり、複雑であると考えられる。本研究では第5章で有対動詞/無対動詞の違いもその一つにあげられることを示す。

### 2.5.2 本研究の分析の視点

以上のことを踏まえて、本研究の分析の視点を定める。まず、本研究でのテアルの位置付けを示す。テアルの基本的な意味は諸研究で大差はなく、益岡の「意志的行為の結果に重点が置かれる『結果相』の表現」に代表される。しかし、本研究ではこれに異を唱え、「無意志」の行為にもテアル構文が使われることを明らかにする。

本研究の分析のアプローチは動詞の分類から始める。順序としては、はじめに第3章で、テアルが接続する動詞と接続しない動詞に分け、その違いが何に由来するのかを分析し、「～ガ～テアル」と「～ヲ～テアル」では、とりうる動詞の性質に違いがあることを示す。次に第4章では、「～ガ～テアル」と「～ヲ～テ

アル」の違いを観察する一方、両者の連続している様子も明らかにする。続いて第5章で、名詞項の性質によって、テアル構文に様々な影響が及んでいることを提示する。最後に第6章で本研究のまとめをする。

## 第3章 テアル構文と動詞の特徴

### 3.1 テアル構文の意味と動詞の特徴

テアル構文の意味は、先行研究でも論及されてきたように、動詞の特徴と関係している。本章では、テアル形を取る動詞の特徴を分析することにより、テアル構文の意味を明らかにする。「テアル形を取る動詞の特徴」といっても、実はこれには二つの異なった意味が含まれており、両者は分けて考察されねばならない。その二つとは次のようなものである。

[ 1 ] テアルが接続する動詞は、テアルが接続しない動詞と比べてどのような特徴の違いが見られるか

[ 2 ] テアルの接続する動詞群の内部で、どのような特徴の違いが見られるか

1.3で記述したように、ある一つの形式の意味を記述していく場合、その外的連関と内的連関の両面から記述を進めることが重要である。上の二つは、それぞれテアル構文の外的連関と内的連関に関係している。[ 1 ]は、テアル構文全体に共通する意味特徴に関わり、他の構文との相違に関係する。[ 2 ]は、テアル構文内部での意味の相違に関係する。以下、本章では[ 1 ]について考察し、その特徴が、「～ガ～テアル」構文の場合は「影響性」に、「～ヲ～テアル」構文の場合は「意志性」と「影響性」にあることを明らかにする。[ 2 ]については次章で考察する。

### 3.2 他動性

#### 3.2.1 動詞の自/他

先行研究では、テアル形を取る動詞と取らない動詞の選択の基準には、動詞の自/他が関与しているとされている。たしかに、次のような例文を見るかぎり、

この指摘は妥当であるかのように見える。

- (56) イチローはバットをロッカーに置いてある。(他動詞)
- (57) 監督はイチローをメンバーに選んである。(他動詞)
- (58) \*イチローはトレード問題に悩んである。(自動詞)
- (59) \*照明灯がついてある。(自動詞)

ところが、この基準は次の表現例では適用できない。

- (60) \*イチローはバットをロッカーに忘れてある。(他動詞)
- (61) \*イチローは出場の機会を待つてある。(他動詞)
- (62) イチローは十分に走りこんである。(自動詞)
- (63) イチローはトレードに反対してある。(自動詞)

先行研究によると、自動詞でもテアル形を取ることがあるとされている。しかし、どのような自動詞がテアル形を取るのかについては、明確に論及しているものはほとんど見当たらない。益岡(1987:227)には「基準時における有効性を示すもの」という記述があるが、抽象的にすぎ、何ら説明にはなっていない。管見の限りでは、唯一 Jacobsen(1991:202)に「他動詞と意志的な自動詞がテアル形を取る」という記述が見えるだけである。

### 3.2.2 動詞の自/他に関する先行研究

ここまで何の説明もなしに「他動詞」、「自動詞」という用語を使ってきた。しかし、これは使用者によってゆれのある、問題の多い用語である。従来のテアルに関する研究は動詞の自/他を自明のことのようにして取り扱っているが、自/他を明確に規定しないで「テアル形を取るのは動詞の自/他に関係がある」などと記述するのは危険である。また、その記述に異を唱えるにしても、動詞の自/他とは何であるのかを定義した上でないと、説得力に欠けることになる。そこで、ここではこの用語について整理しておくことにするが、その前に、本研究で

使う「動作主」、「対象」、「影響」、「影響性」<sup>1)</sup> という用語についての定義をしておく。

「動作主」とは行為を行ったり、感情を抱いたりする主体を指す。感情の主体は「経験者」とでも呼ぶ方がふさわしいが、本研究では特に区別が必要でない限り、便宜上両者を「動作主」と呼ぶことにする。同様に「感情」も、特に必要でない限り「行為」とか「動作」と呼ぶことにする。「対象」とは行為の結果が及ぶものを指す。それは動作主以外である場合もあれば、動作主自身である場合もある。「影響」とは「動作主」の行為が「対象」に及び、変化が生じることを指す。たとえば、釘を打てば釘が刺さり、紙を切れば紙が切れる、という変化が生じることを指す。これには察知されやすいものからそうでないものまで様々な段階があり、こうした性質を「影響性」と呼ぶ。「影響性」という用語は「対象が動作主によって被る影響性」という意味で使うので、たとえば「リンゴを落とすと下に落ちる」と言ったとき、「落とす」も「落ちる」も同じだけの「影響量」を持っているが、「影響性」があるのは「落とす」の方だけである。

このように、「動作主」、「対象」、「影響」、「影響性」という用語の定義をした上で、動詞の自／他の問題を扱っていく。

伝統的に、他動詞とは動作主の動作が対象に及んで変化を起こすもの、自動詞とは動作主の動作が対象に及ばないものであるとされてきた。伝統的な自／他の捉え方では、両者の区別をする形式からの判定基準として、他動詞は（ア）必須名詞項を二つ以上取る、（イ）そのうちの一つはヲ格名詞項を取る、（ウ）直接受け身になる、といった特徴があり、全ての動詞はどちらかに分配され、両者は截然と区別されるかのように論じられてきた<sup>2)</sup>。

ところが、実際には動詞の自／他の区別はそれほど画然としたものではない。次のような動詞は、伝統的な基準によっては明確に分類することができない。

---

1) 「影響性」という用語は竹沢（1991）による。ただし、竹沢は「たたく」、「なでる」、「ほめる」、「叱る」を「非影響動詞」としているが、本研究ではこれらにも影響性があると考え、「affectedness」（Hopper and Thompson 1980）、「結果性」（益岡1987）、「変化」（ヤコブセン1989）、「被動作性」（角田1991）もほぼ同じ概念を表している。

2) この段落は西尾（1982）、寺村（1982 a）、ヤコブセン（1989）、角田（1991）が伝統的な自／他の捉え方を整理した部分を参照した。

- (64) a . エミリーはイチローに触った。 (ア ウ)  
 b . エミリーはイチローの意見に反対した。 (ア ウ)  
 c . エミリーはイチロー(に/と) キスした。 (ア ウ)<sup>1)</sup>  
 d . エミリーはイチローと争った。 (ア )  
 e . エミリーは温泉につかった。 (ア )  
 f . エミリーは主役を降りた。 (アイ )  
 g . エミリーはうなずいた。 ( )  
 h . エミリーはイチローを愛した。 (アイウ)

(64)の右側の括弧の中は、上に述べた形式からの判定基準のうち、いずれが関与しているのかを示したものである。(a)~(f)は、他動詞を識別する判定基準のうちいくつかを欠いているものの、全てを欠いているわけではなく、判定にゆれが生じる。意味の面から見ると、これらの動詞は典型的な他動詞「作る」、「壊す」のように行為の結果を目に見える形で対象に残すわけではないが、何らかの影響を対象あるいは動作主に及ぼしている。また、典型的な自動詞「灯く」、「切れる」が動作主の内容を含意していないのに対し、これらの動詞は動作主の内容を含意している。(g)は、どの判定基準も満たしていないが、動作主である自分自身を対象に「首を動かす」という影響を与えている。(h)は全ての判定基準を満たしてはいるが、対象に対してほとんど影響を与えていない。対象に与える「影響」というものも相対的なもので、(h)で「ほとんど影響を与えていない」と言うのは(g)に比べて視覚的に変化が見えにくいということである。「愛された」イチローには「愛された」という影響が及んでいるが、そのことをイチローが認識しているかどうか、エミリーのことをどう思うかによって「影響」の程度も変わってくる。(h)の場合、イチローよりも「愛した」エミリー自身に心の変化が生じていると言える。

このように、動詞の自/他を分類することは容易ではない。伝統的な分類に無理が生じているのは、全ての動詞を他動詞か自動詞のどちらかに分類しようとし

1) この場合、対称動詞が二格名詞項を取ったときと、ト格名詞項を取ったときとは受動化に違いが生じる。二格名詞項を主語にすると「イチローはエミリーにキスされた」となり、ラレルを付けることができるが、ト格名詞項を主語にすると「イチローはエミリーとキスした」となり、ラレルを付けることができない。



たためである。伝統的な考え方に対し、最近主流になりつつあるのは、動詞の他動性をプロトタイプという概念で捉えようとする考え方である。

Hopper and Thompson (1980) は、動詞の自 / 他は截然と二分されるものではなく程度問題であるとし、他動性の判定基準として「意志性 (volitionality)」や「目的語が被る影響性 (affectedness of object)」など 10 種類のパラメータを設置した。10 種類のパラメータは、どれも二極分化されるものではなく程度に高低のある幅をもったスケールとして提出されている。相対的に程度の高いパラメータを多く持った動詞ほど他動性が高いことになる。

ヤコブセン (1989) も Hopper and Thompson (1980) にならい、他動性をプロトタイプという概念で捉え、次の四つの特徴を備えたものを他動詞のプロトタイプとした。(ヤコブセン1989: 217)

- (a) 関与している事物 (人物) が二つある。すなわち、動作主 (agent) と対象物 (object) である。
- (b) 動作主に意図性がある。
- (c) 対象物は変化を被る。
- (d) 変化は現実の時間において生じる。

ヤコブセンはこのうち特に (b) の「意図性」と (c) の「変化」を中心に論を展開し、Searle の考え方を踏襲しながら、意図を持つ動作主と変化を被る対象物は、人間の心理において深く関わり合っていると主張した。事実、下の (65) に示すように、動作主の意図を持った行為は、対象に変化 (位置の移動) を生じさせるものである。(66) のようなものも、目に見えるような変化はないが、動作主自身に「走りこむ」という「影響」を及ぼしているといえる。(65) と (66) の差は相対的なもので、(65) の方が視覚的に察知されやすいが、(66) も動作主の意図的な行為が対象物 (= 動作主自身) に何らかの変化を与えていることに変わりはない。(67) は「意図性」も対象物に及ぼす「変化」もない。

- (65) イチローはバットをロッカーに置いた。
- (66) イチローは十分に走りこんだ。
- (67) 照明灯がついている。
- (68) イチローはバットをロッカーに忘れた。

このように、ほとんどの場合「意図」と「変化」は相互に関連し合っている。たしかに、意図的な動作は対象に何らかの変化を及ぼすといってよい。しかし、対象に変化が生じれば、それは動作主の意図的な行為によるものであるかという点、必ずしもそうとばかりは限らない。上の(68)は、明らかに対象に変化が生じるが、動作主が意図的に行動したものとは言えない。「うっかり」とか「不注意で」などの副詞をそえると、意図性のないことが明確になる。Hopper and Thompson とヤコブセンは他動性のパラメータとして、「影響性」と「意志性」を入れているが、この二つは分けて考えるべきである。

この点で、前二者の他動性の定義より進展しているのが、角田(1991)である。角田も、他動性をプロトタイプという概念で捉え、他動詞のプロトタイプを次のように定義した。(角田1991:72)

他動詞文の原型の意味的側面：

参加者が二人(動作者と動作の対象)またはそれ以上いる。動作者の動作が対象に及び、かつ、対象に変化を起こす。(動作者と対象は無生物の場合もある。従って、二人でなく、二つの場合もある。)

他動詞の原型：

相手に及び、かつ、相手に変化を起こす動作を表す動詞。

この定義が、Hopper and Thompson およびヤコブセンと大きく異なるところは、「意志性」という要素が入っていないことである。角田は「意志性」を他動詞と自動詞の区別とは無関係の要素だと考える。その理由は、先にも論じたように動作主が無意志の状態で行った行為でも、対象に変化を与える場合があるからである。他動性のパラメータの中から「意志性」を削除したところに角田の価値が認められる。

ただし、次の点において、角田と筆者の主張は異なっていることを強調しておく。角田は「殺人未遂」の場合を「殺す意志はあるが動作が対象に及ばない例」としてあげ、「意志性」が「影響性」とは関係ない証拠としているが、次の二つの理由からこの見解には賛同しかねる。一つ目の理由は、殺されそうになった対象は、目には見えなくても「危ない目に遭った」など、何らかの「影響」を受けていると考えられるからである。たとえ対象に与える影響が小さくても、それが

ゼロでない限りプロトタイプ論的な考え方からすれば「影響性がある」とされねばならないのである。二つ目の理由は、角田の考えによると、他動性の低いところには動作主自身に影響を及ぼす動詞が位置している。それならば、たとえ動作主以外の対象に与える影響がゼロであったとしても、動作主自身に影響が及んでいるので、「影響性がある」とされなければおかしいからである。このように考えると、「殺人未遂」の場合も、動作主には「殺人未遂を犯した」という影響が及んでいるのである。このようにプロトタイプ論的に考えていくと、動作主の意志的な行為には全て「影響性がある」ということになる。

角田は形の側面からは、「～ガ～ヲ」構文、直接受動文、間接受動文、再帰文、相互文を他動性の判定基準にあげているが、必ずしもそれらの特徴を多く持ち合わせたものが他動性が高いとは論じていない。

### 3.2.3 本研究における動詞の他動性の定義

3.2.2 で見てきたように、従来の他動性の定義には問題が多い。それが従来のテアル構文の誤った記述の原因ともなっている。本研究では、「意志性」と「影響性」が本質的に別のものであることを主張する。両者を分離し、これまでとは別の観点から動詞の統語的特徴を見ることによって、テアル構文に関する記述をより精密にすることを志向する。

Hopper and Thompson や ヤコブセンのように、他動性をプロトタイプ概念を使って捉える方法は有効である。ただし、その場合いかなるパラメータによって他動性を判定するかが問題となる。従来、その重要な側面として「意志性」と「影響性」のあげられることが多かった。そこにおいて議論のベースとなったのは、「意志性」と「影響性」がちょうど原因と結果という関係になり、切り離せないほど密接に繋がっていると捉える考え方であった。たしかに、意志性を持った行為は全て対象に影響を与えると言えるであろう。しかし、対象に影響が及ぶからといってそれが動作主の意志的な動作によるとは限らない。

たとえば、「殺す、置く、蹴る、放す」などの動詞は高い影響性を持っているが、常に意志的な動作を表すのかというと、必ずしもそうではない。場合によっては無意志的な動作を表すこともある。これらの動詞は、日常生活において意志

的に行われる動作を表すことが多いが、「うっかり」とか「無意識のうちに」してしまった動作を表すこともある。意志/無意志を表す副詞と共に起して、「意図的に殺す」、「誤って殺す」がともに言えることから、この種の動詞は「意志性」に対して「中立」であると言えるのである。また、数は少ないが「口走る、(笑いが)噴き出す、なくす、はやまる、見かける、出会う」のように、「影響性」はあるが「意志性」のない動詞もある。「意志性」は「他動性」とは本質的に別のものなのである。

以上の考察から、本研究では、動詞の他動性を次のように意味的な側面から定義する。

#### (69) [動詞の他動性の定義]

絶対的に二極分化できるものとは考えず、相対的なものだと考える。動作主の行為が対象に及び、かつ対象に影響を及ぼすものを他動詞のプロトタイプとする。影響性が低くなるにしたがって、他動性が低くなり、自動性が高くなる<sup>1)</sup>

この定義によると、「他動性」と「影響性」は同じものを指すことになり、「意志/無意志」とは関係しないことになる。ただし、従来 of 意志性をも含めた他動性と区別するため、以後本研究では従来 of ものを「他動性」と呼び、新しく定義した方を「影響性」と呼ぶことにする。

### 3.2.4 「影響性」の有効性と限界

従来 of 動詞の他動性を上述のように定義し直して、もう一度(56)～(63)を検討する。まず、伝統的に自動詞と呼ばれてきた(58)、(59)、(62)、(63)から見ていく。これらは典型的な他動詞と違い、行為の結果が目に見える形で残らないという意味で影響性の低い動詞である。(58)、(59)と(62)、(63)

---

1) 「他動性」を判定する形式からの側面として、他動性の高いものほど「必修名詞項を二つ以上取る」、「ヲ格名詞項を取る」、「直接受け身になる」などの傾向があるが、これを絶対的な判定基準とはせず、あくまで意味的な側面から捉えていく。

の動詞の違いは、Jacobsen (1991) が指摘するように「意志性」の有無に求められる。そこで、自動詞の場合、意志性のある自動詞はテアル形を取り、意志性のない自動詞はテアル形を取らないことが分かる。

一方、他動詞は(56)、(57)に代表されるように従来暗黙の了解のうちに意志性があるものと見なされてきた。しかし、(60)のように高い影響性を持ちながら意志性のない他動詞も存在し、このような動詞はテアル形にすることができない。また、(61)は(62)、(63)と同様に、動作主自身に行為の影響が及んでいるにもかかわらず非文になってしまう。Jacobsen (1991) の指摘は一見正しいかのように思われるが、(60)、(61)のような文が非文となる理由は説明できない。

結局、影響性つまり自動詞か他動詞かという特徴によって、テアル形を取るか取らないかを判断することには限界があったのである。しかし、動詞の「影響性」は、3.4.2で論じるようにテアル形を取る・取らないに大きく関与しているのである。ここで「限界がある」と言っているのは、「影響性」だけを判定基準にすることはできないという意味である。

### 3.3 意志性

#### 3.3.1 テアル形と「意志性」

ある動詞がテアル形になるかどうかという判定基準として、先行研究では、動詞の自/他以外に「意志性」を重視している。高橋(1969)、吉川(1973)、寺村(1984)、益岡(1987)はいずれもテアル構文の意味特性として、「人間の意志」をあげている。そこで本節では、「意志動詞/無意志動詞」に焦点を当てて考察する。「意志動詞」とは、主体の意志によってコントロールできる動作を表す動詞のことをいう。「意志動詞/無意志動詞」という分類は、「意志」はもちろんのこと、「命令」、「禁止」、「可能」などの表現とも関連のある、一般性の高い動詞分類である。

ここで再び(56)～(63)を「意志性」の観点から検討すると、(61)を除く他の文の容認度の違いは「意志性」の有無に求めることができる。つまり、「意

志性」のある動詞はテアル形になり、そうでない動詞はテアル形にならないのである。(60)は「影響性」はあるが「意志性」がないので、他動詞だが非文となる。こうして見ると、動詞の自/他を考慮しなくても「意志性」一つで説明することが可能であると考えられる。それでも(61)のように、意志性があるにもかかわらずテアル形にならない動詞がわずかに残る。これらには、別の要因が関わっていると思われるが、その要因も解明されねばならない。そこで、次に「意志性」の有効性とその他の要因について考察していく。

### 3.3.2 仮説と検証

まずはじめに仮説を立て、その後で検証していくことにする。

(70) 仮説 I : テアル形を取る動詞は「意志動詞」である

[ 検証 1 ] シテアル = シヨウ = シロ = スルナとなるか

仮説を検証するに当たって、まず当該動詞が意志動詞か無意志動詞かを判断しなければならない。意志動詞を抽出する形式面からの判定基準として、当該動詞が意志形(シヨウの形)になるかどうかといったテストがある。テアル形になる動詞と意志形になる動詞がイコールで結ばれれば、仮説は証明されたことになる。管見の限りでは、人間の意志によってコントロールできる動作を表す動詞は全て意志形になる。

なお、村木(1991:71-3)および仁田(1991:212-3)に論じられているように、シヨウには「意志」以外にも、「申し出」(お送りしましょう)、「勧誘」(一緒に行こう)、「推量」(今日は晴れましょう)、「譲歩」(どこに行こうと君の自由だ)といった用法があるが、本研究でシヨウの形になるかならないかという判定は、あくまでも「意志」のシヨウである<sup>1)</sup>。

本検証では同様に、当該動詞が命令形(シロの形)、禁止形(スルナの形)に

---

1) 「シヨウ」という形を、村木は「意志」、「勧誘」、「推量」、「譲歩」といった意味に分類し、仁田は「推し量り」、「意志」、「行為提供の申し出」、「誘いかけ」といった意味に分類している。

なるかどうか調査する。命令形は聞き手に意志的に行為をさせることを、禁止形は聞き手に意志的に行為をさせないことを表す形式である。仮説Ⅰが正しいとすれば、テアル形になる動詞は意志形、命令形、禁止形にもなると考えられる。

そこで、実際に『日本語基本動詞用法辞典』にある動詞を含む1020語を調査したところが、必ずしも「シテアル＝シヨウ＝シロ＝スルナ」とはならなかった。その結果を[表3 - 1]に示す。表の網を掛けたところは、どの形にもなる動詞(B、C、D、E)およびどの形にもならない動詞(N、O)である。問題となるのはそれ以外の動詞である。以下[検証2～5]で詳しく考察する。

テアル形になる	意志形にならない			(卵を)産む、(エサを)ついでむ、(置き)忘れる	A	
	ガ			置く、開く、作る、買う、殴る、蹴る、壊す、書く	B	
	意志形になる	命令形になる	禁止形になる	なでる、読む、見る、生かす、呼ぶ、教える、覚える、歌う	C	
	フ			着る、脱ぐ、浴びる	D	
	ト			争う、結婚する、触る、昇る、通う、親しむ、協力する、反対する、歩く、走る、行く、座る、寝る	E	
テアル形にならない	意志形になる	コントロール可能	～ヲを取る	勝つ、信じる、信仰する、待つ	F	
			～ヲを取らない	生活する、暮らす、生きる、成長する、死ぬ、いる	G	
		コントロール不可能(～ツトメヨウ)	～ヲを取る	感じる、思う、尊敬する、喜ぶ、知る	H	
			～ヲを取らない	笑う、泣く、怒る	I	
	命令形になる	禁止形になる		おっしゃる、召し上がる、下さる、くれる、なさる	J	
				鳴く、吠える、さえずる、はばたく	K	
	意志形にならない	命令形にならない	禁止形になる		間違える、誤解する、悩む	L
					口走る、(笑いが)噴き出す、なくす、はやまる	M
		命令形にならない	禁止形にならない		見かける、出会う、見える、聞こえる	N
					咲く、降る、照る、光る、氷る、流れる、灯く、故障する、ある、いる(存在)	O

[表3 - 1]



[ 検証 2 ] テアル形にならないが、意志形になる動詞<sup>1)</sup>

これに当てはまる動詞はさらに二つに分かれる。F、Gは動作主の意志によってコントロール可能なもの、H、Iはコントロール不可能なものである。

まず〔F〕について見ていく。

・「勝つ」、「信じる」

「勝つ」は、「勝とう」、「勝て」、「勝つな」と言うことができる。喧嘩で自分より弱い相手に意識的に勝ったりも勝たなかったりもできる。だが、強い相手にはコントロールが効かない。意志性という点では、判断に迷う境界的な動詞である。「信じる」もコントロールの効きにくい動詞で、「信じよう」は「信じ込むようにしよう」くらいの意味である。従来テアル形とテオク形の関連性が指摘されているが、テオク形は容認可能な文になるのに、テアル形は不自然な文になる。

(71) a . 優勝のためにライオンズに勝っておかなければならぬ。

b . ?優勝のためにライオンズに勝ってある。

(72) a . あなたのおっしゃることだから信じておきますわ。

b . ?あなたのおっしゃることだから信じてありますわ。

・「信仰する」

「信仰する」は「信じる」に近いが、「信じる」ほどコントロールの効かないものである。次の例文を見てみよう。

(73) a . ?イカサマ教を信仰しよう。

b . イカサマ教を信仰しろ。

c . イカサマ教なんか信仰するな。

d . ?イカサマ教を信仰しておく。

e . ?イカサマ教を信仰してある。

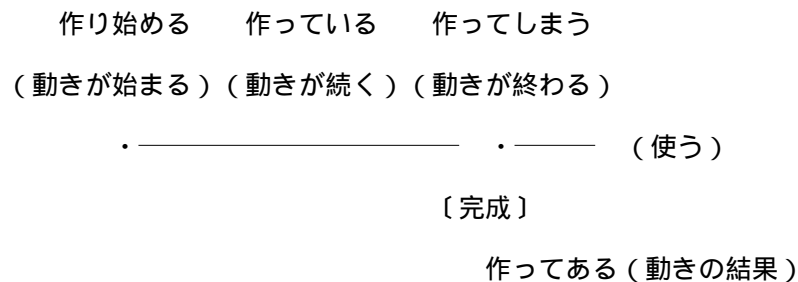
---

1) 今回調査した限りでは、意志形になる動詞は命令形にも禁止形にもなる。ただし、Aの動詞を除く。

動作主自身の決意として(a)のように言えないこともないが、普通信仰しようと思って信仰できるものではないので不自然な文となる。(a)は他者への呼びかけとして「勧誘」の意味で使うのなら適切な文になる。(b)、(c)は他者への呼びかけに使っているので適切な文となる。「信仰する」は、Hに近いと思われるが、それよりは動作主のコントロールが働きやすいと思われる。コントロールの働きにくい人であれば、Hに分類するかもしれない。

・「待つ」<sup>1)</sup>

「待つ」は上記の三語とは異なった理由によってテアルを付けることができない。ここで、「待つ」と「作る」を比べてみよう。高橋(1985:11)によると、「作ってある」は動きの過程の中で、次の図の( )の部分に当たる。



[図3 - 1]

「作る」という動作は、通常何かを完成させるためだけにするのではなく、その後何かに使うために行う動作である。そのため、動きの結果というアスペク的な側面を無視することができない。「作ってある」はそのようなアスペク的な意味を表す表現形式である。

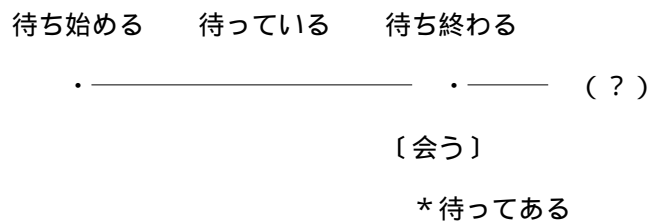
詳細は第4、5章で考察するが、「作る」のように影響性の高い動詞は、「目的」の意味が入らない場合でもテアル形になる。たとえば、「アッ、あそこに芸術作品が作ってある」などの場合がそうである。しかし、「影響性」の低い動詞の場合は、「目的」の意味の入るときでなければテアル形になることができない。

---

1) 「待つ」に関しては、名古屋大学の宋協毅氏の教示によるところが大きい。

たとえば、「歌う」は「カラオケ大会に出場するため」などの「目的」がなければテアル形になることはできない。

「待つ」は「影響性」は低いが、「誰かと会うため」とか「平和な時代を向かえるため」などの「目的」を想定することができる。そこで[図3-2]にならって「待つ」を図にすると、[図3-3]の( )の部分に「待つてある」という形式が来るはずである。ところが、結果は否である。



[図3-2]

これは「作る」、「歌う」と「待つ」とでは、同じ「目的」でも違いがあるからである。前者はその行為の終了した後にも、まだその目的は達成されておらず、その行為は目的を達成するための手段でしかないのである。それに対して後者では、待ち終わると同時に目的も達成されてしまう。具体的に言うと、「誰かと会った瞬間」、「平和な時代が訪れた瞬間」に、「待つ」という行為も終わり、目的も達成される。「待つ」にテアル形がないのは、待った後の結果を表す表現形式は必要ではないからである。同様に「\*見つからないように隠れてある」、「\*彼の目を見ないようにうつむいてある」が非文となるのも、行為の終了とともに目的が達成されるためであると考えられる。

次に〔G〕について見ていく。

- ・「生活する」、「暮らす」、「生きる」

これらはともに人間の長い期間に渡る行為を表す動詞である。人間の生まれてから死ぬまでに渡る期間を表すこともあれば、「苦しい戦時中を生きた」のように限られた期間に使われることもある。通常その行為は人間が格別に意識して行うものではないが、意志的な行為を表すこともあり、その場合には「決意」の意味が前面に出て、意志形、命令形、禁止形にすることができる。しかし、テアル

形は非文となる。

- (74) a . 今日から一人で生活しよう / 暮らそう / 生きよう。  
b . 今日から一人で生活しろ / 暮らせ / 生きろ。  
c . 一人なんかで生活するな / 暮らすな / 生きるな。  
d . \*今まで一人で生活してある / 暮らしてある / 生きてある。

これらの行為の「目的」を考えてみると、「生きるために生きる」とか「暮らすために暮らす」のようになる。これらの動詞は「行為」と「目的」が同じなのである。これらの動詞をテイル形にした「生活している」、「暮らしている」、「生きている」は、「結果相」の意味にはならず「継続相」の解釈にしかない。これらの動詞は「結果相」を表すことができないので、テアル形にならないのである。

・「成長する」

話し手や聞き手の希望として「もっと大人に成長しよう」、「人間的に成長しろ」、「オバタリアンに成長するな」と言うことができる。しかし、これはあくまで話し手の「希望」にすぎず、実際に自分の意志でコントロールできるわけではないので、テアル形は非文となる。

・「死ぬ」

病気や老衰で「死ぬ」場合は意志性がないが、自殺して「死ぬ」場合は意志性がある。しかし、どちらもテアル形にならない。「待つ」と違って、死ぬために死ぬだけではなく、「死んだ後に何か結果を残すため」という「目的」の意味が入る場合もある。たとえば、「死んで責任をとるため」とか、「妻子に保険金を残すため」とかである。だが、それでもテアル形にはならない。

第4章で詳しく考察するが、「死ぬ」のように行為が動作主に及ぶ動詞は「行為描写文」に使われる傾向がある。その場合、動作主は一人称（疑問文では二人称）になるという人称制限がある。三人称を主語にして「情景描写文」にするには「誰かが死んでいる」のようにテイル構文にしなければならない。死んだ人が

自分の行為を語ったり、生きている人が死んだ人と会話するといったことは、通常なことであるから、「死ぬ」はテアル形にならないのである。もし黄泉の国に行けば「この世で一緒になるために私は死んでいるのです」という会話が聞かれるかもしれないが、「死ぬ」と言う言葉には「それで終わり」という意味が入っているので、不自然な感じは残る。

・「いる」

森田(1989)は「『ある、いる』は本来、状態性の動詞のため、ことさら『ている／てある』を付ける必要はなく、事実付かない」と記述している。しかし、森田は「いる」に二種類あることを見落としている。一つは「存在のいる」で、「アッ、熊がいる！」のようなものであり、もう一つは「今日は寒いから家にいるよ」というときの「行為のいる」である。前者は森田の論じているとおりの理由で「\*いてある」とはならない。後者は「状態」ではないため「いよう」、「いる」、「いるな」とは言える。しかし、「\*いてある」とは言えない。

最後に〔H〕、〔I〕について見る。

・感じる、思う、尊敬する、喜ぶ、知る

・笑う、泣く、怒る

H、Iは、自分の意志でコントロールできない「知識」、「感情」を表す動詞である。意志形、命令形、禁止形になるが、これらは「そうするようにツトメヨウ」、「そうするようにツトメロ」、「そうしないようにツトメロ」という意味である。意志性が低く、Fの「信じる」などの動詞と連続している。

以上、F、G、H、Iは、意志形などになるものの、動作主のコントロールが効きにくい意志性の低い動詞であるためテアル形にならない。また、「待つ」などの動詞はアスペク的な制約により、「意志性」はあってもテアル形にならない。

[ 検証3 ] テアル形、意志形にならないが、命令形になる動詞<sup>1)</sup>

---

1) 今回調査した限りでは、命令形になる動詞は禁止形にもなる。

これに当てはまる動詞はさらに二つに分かれる。Jは動作主が二/三人称になるもの、Kは動作主が動物になるものである。

まず、〔J〕から見ていく。

・「おっしゃる」、「召し上がる」、「下さる」、「なさる」

これらは二/三人称を動作主にする動詞である。たとえば「おっしゃる」は「言う」の尊敬語であるため、「意志性」は「言う」と同じ程度だけある。そのため、(75)のように、話し手の意志に關与する「意志形」にならないが、聞き手の意志に關与する「命令形」や「禁止形」にはなる。

- (75) a . \*あなた、そのようにおっしゃろう。  
b . あなた、そのようにおっしゃいませ。  
c . あなた、そのようにおっしゃいますな。

ところが次の(76a)のようにテアル形では不自然な文となる。

- (76) a . ?あなたが警察にそのようにおっしゃってあるのなら安心です。  
b . あなたが警察にそのようにおっしゃっているのなら安心です。

ただし、(a)のように言うことがないこともない。その場合、(b)と比べると何かのためにという「目的」の意味が強く表れる。それにしても、(77)と比べると容認度は落ちるであろう。

- (77) あなたが警察にそのように言っているのなら安心です。

「召し上がる」は「食べる」の尊敬語なので「影響性」が高く、第4章で論じるように「～ガ～テアル」構文にして「情景描写文」を作ることができるはずである。しかし、(78)の(a)に比べて(b)、(c)は容認度が落ちる。「召し上がる」を使う場合は(d)のようにテイル構文にするか、(e)のようにラレテイル構文にしなければならない。

(78) (食事し終わっている情景を見て)

- a. アッ、もう食べてある。
- b. ?アッ、もう召し上がってある。
- c. ?アッ、もう召し上がっておありになる。
- d. アッ、もう召し上がっていらっしゃる。
- e. アッ、もう召し上がられている。

断言できる証拠をここで提示することはできないが、尊敬語とテアル構文はなじまないようである。

・「くれる」

「くれる」は他者から話し手に向かって物が移動することを表す「授受動詞」である。「他者から話し手への物の移動」をテアル構文を使って表現するには、「\*誰々が私にくれてある」とするのではなく、話し手自身を主語にして「私は誰々からもらってある」としなければならない。他者を受け手とする「君にはあげてある」という文なら適切な文となる。以上の考察から授受動詞の「くれる」は「視点」の問題によりテアル形にならないのである。

次に〔K〕について見ていく。

・鳴く、吠える、さえずる、はばたく

これらは動物の動作を専門に表す動詞である。言語を操る動物がいれば、「どれひとつ、ホーホケキョと鳴こうかな」と言うのかもしれないが、通常そういうことはありえないので「意志形」にはならない。「鳴けよ、ウグイス」とか「鳴くな、春の鳥」のように「命令形」や「禁止形」にはなるが、本来の「命令」や「禁止」ではなく「～シテ(シナイデ)ホシイ」という「願望」を表すにすぎない。これらは意志性が低い動詞なのでテアル形を取ることができないのである。また、後述する「～ヲ～テアル」構文の人称制限からもテアル形を取ることができない。

以上の考察からテアル構文には人称制限があることが分かった。Jは聞き手の意志的な行為に働きかけることができるので、命令形と禁止形になる。意志性の点から言えばB、C、D、Eと変わらないが、尊敬語の場合容認度が落ちるようである。Kのように動物が主語になると、意志性と人称制限の問題からテアル構文にならない。

[ 検証4 ] テアル形、意志形、命令形にならないが、禁止形になる動詞

まず〔L〕からみていく。

・「間違える」、「誤解する」、「悩む」

これらの動詞は、『日本語基本動詞用法辞典』では意志形や命令形にはならないとされている。しかし、一般的ではないがシチュエーションさえ整えば十分意志形や命令形になる。

(79) a . P K O問題についてもっと真剣に悩もう。

b . P K O問題についてもっと真剣に悩め。

c . P K O問題なんかであまり真剣に悩むな。

ただし(79)からも分かるように、その意味は「～ツトメヨウ」である。Lは「意志形」や「命令形」を使うことが少ないというだけのことであって、Hに含められるべきものなのである。

次に〔M〕を見ていく。

・「口走る」、「(笑いが)噴き出す」、「なくす」、「はやまる」

これらは無意志の動作を表すものなので、「意志形」にも「命令形」にもならない。しかし、忠告として「～しないようにツトメヨウ」と言うことはできるので「禁止形」になる。この点で、「禁止形」にもならないNの動詞とは違いがある。ちなみにNは動作主に人が来るという点で、人を動作主に取らない典型的な自動詞Oと区別される。

このように、L、Mはともに「意志性」の低い動詞であるため、テアル形にす



ることができないのである。

以上 [ 検証 2 ~ 4 ] の結果から、テアル形にならない動詞は形式上「意志形」などの形を取ったとしても、その意味は「～ツトメヨウ」という意味であり、動作主の意志でコントロールのできない意志性の低い動詞であることが分かった。また、J、Kの検証から、テアル構文には人称制限があることが分かった。人称制限については第4、5章で詳しく考察する。「待つ」など意志性を持っていてもテアル形にならない動詞のあることも分かったが、これらはアスペク的な制約によりテアル形にならないのである。

ここまでの考察から、仮説I「テアル形を取る動詞は意志動詞である」は、証明されたと言えそうである。試みに、先にあげた(64)を使って検討してみよう。(64a~g)は「目的」の意味が加わるならば、(80a~g)のようにテアル構文にすることができる。

(80) a . ( 有名人に触ると縁起がいいので )

私はイチローに触ってあります。

b . ( イチローの思うとおりにはさせたくないので )

私はイチローの意見に反対してあります。

c . ( 愛を誓いあうために )

私はイチロー ( に / と ) キスしてあります。

d . ( 法的に裁判で争ったほうが得策なので )

私はイチローと争ってあります。

e . ( 神経痛を治すために )

私は温泉につかってあります。

f . ( 宝塚の先輩に苛められるのを怖れて )

私は主役を降りてあります。

g . ( 上司のご機嫌を損ねないために )

私はうなずいてあります。

h . \* 私はイチローを愛してあります。

しかし、(64h) にテアルをつけた(80h) は非文となる。これは、(a ~ g) の動詞が動作主の意志によってコントロールすることができる「動作」を表すのに対し、(h) の動詞は動作主のコントロールの効かない「感情」を表すためである。仮に、自分の意志で「愛そう！」と思って愛せる人がいたとすれば、(80h) も適切な文になる。

こうして仮説 I は一見証明されたかのように思われる。しかし、A を検証するとこの仮説には問題があるようである。

### 3.3.3 「意志性」の有効性と限界

3.3.2 で検証してきたように多くの動詞は意志性の高低によってテアル形の容認度を説明することができる。しかし、A について検証すると必ずしもそうとは言い切れないことが分かる。

[ 検証 5 ]

・ 「(卵を)産む」、「(エサを)ついでむ」

これらの動詞は動物の動作を表す。そのため、K の「鳴く」などと同じ理由で「意志形」にはできず、「命令形」や「禁止形」にならできる。

(81) a . ニワトリが「\*ここで卵を産もう / 鳴こう！」と叫ぶ。

b . ニワトリよ、卵を産め / 鳴け！

c . ニワトリよ、卵を産むな / 鳴くな！

(81) に示すとおり、「意志性」という点で A と K は共通している。しかし、テアル形にした場合、次の(82)のように A は適切な文になることもあるのに K は非文となってしまう。

(82) a . アッ、あそこに卵が産んである。 (A)

b . ?うちのニワトリは卵を産んである。 (A)

c . \*アッ、あそこでニワトリの声が鳴いてある。 (K)

上の例文で、(a)と(c)の容認度の違いを「意志性」に求めることはできない。実は、(a)と(c)の容認度の違いは、「行為の結果の状態が視覚で捉えられるか否か」というところ、つまり「影響性」にある。なお、(a)と(b)の容認度の違いは、「情景描写文」であるか「行為描写文」であるかというところにあるが、詳細は第4章で論じることにする。

・「(置き)忘れる」

「忘れる」は意志性の低い動詞なので、Hの「知る」などと同じ理由で「～ツトメヨウ」の意味なら「意志形」、「命令形」、「禁止形」になる。

- (83) a . 嫌なことは忘れよう。 / 人の痛みを知ろう。  
b . 嫌なことは忘れろ。 / 人の痛みを知れ。  
c . 嫌なことでも忘れろな。 / 余計なことは知るな。

ところがテアル形にした場合、次の(84)のようにAは適切な文になることもあるのに、Hは非文となってしまう。(a)は明らかに無意志的な動作である。

- (84) a . オヤ、弁当が忘れてある。 (A)  
b . \*うちの娘は弁当を忘れてある。(A)  
c . \*オヤ、企業秘密が知ってある。(H)

実は、(84a)の「忘れる」は「置き忘れる」という意味であり、Bの「置く」に近い意味を表す。ただ、「置く」が意志的行為も無意志的行為も表すことができるのに対し、この種の「忘れる」は無意志的行為しか表すことができないといった違いがある。「置く」も無意志的な動作を表す場合には意志形にならないが、その場合でも(85)のようにテアル構文を作ることができる。

- (85) オヤ、娘に持たせたはずの弁当が家に置いてある。

「(置き)忘れる」のような動詞の特徴も「行為の結果の状態が視覚で捉えられ

るか否か」というところにある。

以上の検証から、「(卵を)産む」、「(エサを)ついでむ」、「(置き)忘れる」のように、意志性がないにもかかわらず、テアル構文を作る動詞のあることが分かった。さて、これらの動詞を例外として扱えば仮説Ⅰは証明されたことになる。しかし、そう簡単に結論することはできない。その理由は、(85)のような文はBの中からいくらでも作ることができるからである。

結局、意志性という特徴によって、テアル形を取るか取らないかを判断することには限界があったのである。しかし、3.3.2で考察したように、「意志性」はテアル形を取る／取らないの基準に大きく関与しているのである。ここで「限界がある」と言っているのは、「意志性」だけを判定基準にすることはできないという意味である。

### 3.4 影響性と意志性の分離

#### 3.4.1 「情景描写文」と「行為描写文」

3.2および3.3の考察から、テアル形を取る動詞の特徴は「影響性」でも「意志性」でも十分に説明できないことが分かった。そうかと言ってそれに変わる特徴も見えてこない。先の考察からも明らかのように、やはり「影響性」と「意志性」はテアル構文に深く関わっているのである。しかし、本研究では従来論じられてきたように、全てのテアル構文に同一の基準が関わっているのではない。従来の基準では無意志動詞がテアル形を取ることを説明できないからである。

本研究では、同じテアル構文でも「影響性」の関与する構文と「意志性」の関与する構文の二種類があることを明らかにする。従来、テアル構文には「～ガ～テアル」構文と「～ヲ～テアル」構文のあることが指摘されてきた。前者はガ格に「対象」を取り、「(対象)ガ～トイウ状態ニサレテイル」という意味を表し、後者はガ格に「動作主」を取り、「(何かの目的のために)(動作主)ガ(対象)ヲ～トイウ状態ニシタ」という意味を表す。第2章にも記したように、先行研究でもしばしば両者の相違について論及されてきた。しかし、動詞の特徴に関して

は、両構文とも分けることなく同一の基準によって規定されてきた。実はここに問題があったのである。

ここで発想の転換をしよう。つまり、「～ガ～テアル」構文になる動詞と「～ヲ～テアル」構文になる動詞では、その特徴に違いがあると考えてみてはどうであろうか。それぞれの動詞の特徴の違いをもたらす原因は、それぞれの構文の特徴に帰せられるはずである。両構文の特徴を比較すると、前者は「話し手が五感や心でもって感覚的に認知した眼前の情景を描写する文」、後者は「動作主が何かの目的のためにした行為を描写する文」である。「～ガ～テアル」構文は「情景描写文」のうち、動作主の行為によって変化を受ける「対象」に焦点を当てた文である。もちろん、その変化は人間の意志的な行為による場合もあるが、人間の無意志的な行為や動物による行為の場合もある。（なお、自然現象による場合は「～ガ～テイル」となる。）そのため、動詞に「影響性」は要求されるが「意志性」は要求されない。

一方、「～ヲ～テアル」構文は「行為描写文」のうち、何かの目的のために行った動作を表すが、これは動作主の意志的な行為によっている。そのため、動詞に「意志性」が要求される。意志的な行為には常に変化が伴うので付随的に「影響性」が伴う。

理屈では以上のようになるが、実際にそうなるかどうかは検証してみないと分からない。そこで、次に新しい仮説を立てて検証する。

### 3.4.2 新しい仮説と検証

(86) 仮説 II : テアル形を取る動詞の特徴は、次のようになる。その程度が高いほど容認度が高くなる

[ X : 情景描写文 ] の場合..... 「影響性」

[ Y : 行為描写文 ] の場合..... 「意志性」と「影響性」

なお、ここで注意しておくことがある。先行研究ではおよそ「～ガ～テアル」構文と「～ヲ～テアル」構文についてのみ焦点が当てられてきた。しかし、これ以外にも「～ニ～テアル」構文、「～ト～テアル」構文、あるいは「眠ってある」

などの「～ ～テアル」構文などがある。これらの文も [ X ]、[ Y ] の中に含めることにする。

[ 検証 ]

まず、これまでに問題となった例文を再掲して検証する。（“影”は「影響性」を、“意”は「意志性」を表す。例文右のカッコ内の“ ”はそれぞれの性質が高いことを、“ ”は低いことを、“×”はないことを表す）

		影 意
(56)	イチローはバットをロッカーに <u>置いてある</u> 。	( Y :     )
(56')	バットがロッカーに <u>置いてある</u> 。	( X :     )
(60)	*イチローはバットをロッカーに <u>忘れてある</u> 。	( Y :     × )
(60')	*イチローはコーチの注意を <u>忘れてある</u> 。	( Y :     × )
(82) a .	アッ、あそこに卵が <u>産んである</u> 。	( X :     )
	b . ?うちのニワトリは卵を <u>産んである</u> 。	( Y :     )
	b' . 私は子供を <u>産んである</u> 。	( Y :     )
	c . *アッ、あそこでニワトリの <u>声が鳴いてある</u> 。	( X :     )
(84) a .	オヤ、弁当が <u>忘れてある</u> 。	( X :     × )
	b . *うちの娘は弁当を <u>忘れてある</u> 。	( Y :     × )
	b' . 私はわざと弁当を <u>忘れてある</u> 。	( Y :     )
	c . *オヤ、企業秘密が <u>知ってある</u> 。	( X :     × )

(56) は [ Y ] であり、「意志性」が高いので適切な文となる。(56') は [ X ] であり、「影響性」が高いので適切な文となる。(60) は [ Y ] であり、「影響性」は高いが「意志性」はないので非文となる。(60') も [ Y ] であり、「影響性」が低く「意志性」もないので非文となる。(82 a) と (84 a) は [ X ] であり、動作主の「意志」とは関係なく「影響性」が高いので適切な文となる。(82 b) と (84 b) は [ Y ] であり、「影響性」は高いが「意志性」が低いので非文となる。(82b') と (84b') も [ Y ] であり、「影響性」は (82 b) や (84 b) と同程度であるが、「意志性」が高いので適切な文となる。(82 c) と (84 c) は

[ X ]であるが、( 82 a ) や ( 84 a ) と違い「影響性」が低いので非文となる。

その他、( 87 ) のように「影響性」が低く、「意志性」の高い動詞もある。

#### 影 意

( 87 ) a . ?ルパンは金庫に触ってある。( Y :        )

b . ?金庫が触ってある。( X :        )

( a ) は [ Y ] であり、「意志性」は高いが「影響性」は低いので不自然な文になる。ただし、「何かのために」というシチュエーションがあれば適切な文になる。( b ) は [ X ] であり、「影響性」が低いので不自然な文になる。ただし、「触った」結果金庫が動き、視覚的にその変化を見取ることができる場合は、このように言うことが可能である。この場合、「触る」の「影響性」は高くなる。

以上の結果から仮説 II は証明された。[ 表 3 - 2 ] にその様子を示す。

[ X ]		意志性	
		高い	低い
影響性	高い	1	
	低い	* 2	*
[ Y ]		意志性	
		高い	低い
影響性	高い		*
	低い	3	*

1 “ ” は適切な文になることを表す。

2 “ \* ” は非文になることを表す。

3 “ ” は「目的」の意味が入れば、許容されやすいことを表す。

[ 表 3 - 2 ]

### 3 . 5 第 3 章のまとめ

本章では、テアル形を取る動詞と取らない動詞とでは、その特徴にどのような

違いが見られるのかを考察してきた。これは、従来、「他動詞と意志的な自動詞」がテアル形を取るとされてきた。そこでの「他動詞」とは、従来、暗黙の了解のうち「意志性がある」とされてきたものである。しかし、本章で見たように、「影響性」と「意志性」はそれぞれ独立した要素である。そこで、本研究ではそれらを分離して分析を行った。すると、「影響性」が高くても、テアル形を取らない動詞や、「意志性」がなくてもテアル形を取る動詞が多数存在することが分かった。それならば、「影響性」も「意志性」もテアル形の成否とは全然関係ないのかということ、両者がそれに深く関わっていることも否定できない。

そこで発想の転換をしてみた。つまり、テアル構文には二種類あって、「影響性」の関与するものと、「意志性」の関与するものがあると考えたのである。こうして、「情景描写」をするテアル構文には「影響性」が、「行為描写」をするテアル構文には「意志性」および付随的に「影響性」が関与していることを明らかにした。

このように、同じテアルでも、取りうる動詞の性質に違いの生じる原因は、「テアル」自体にあるのではなく、テアルを包み込む「構文」にあったのである。構文の性質の違いが、取りうる動詞の性質の違いに反映していたのである。

その他、本章では、「待つ」などの動詞がテアル形を取らない理由を解明した。これらの動詞は、アスペクト的な理由から、テアル形を取ることができないのである。このことから、「テアル」はアスペクトを表す形式であることが実証された。



## 第4章 テアル形を取る動詞の内的連関

### 4.1 動詞の内的連関

本章では3.1で述べた、[2]「テアルの接続する動詞群の内部で、どのような特徴の違いが見られるか」について考察する。このことに関して益岡(1987)では、「～ガ～テアル」構文と「～ヲ～テアル」構文の違いとして考察され、両構文の違いは、接続する動詞の「他動性」の違いによって生じているとされている。つまり益岡は、動詞の「対象指向性」、「行為指向性」の違いが構文の違いに反映していると考えているのである。

[2]の特徴は、[1]の特徴とも関連しているが、前章でも考察したように、益岡の提示した[1]の特徴には誤りがある。益岡はテアル形を取る動詞には全て「意志性」があるとしているが、「意志性」のない動詞にもテアル形を取るものは多数存在するのである。益岡はテアル形を取る動詞全てに同一の基準を当てはめようとしたために、誤った記述になってしまったのである。それに対し本研究では、[1]について[X:情景描写文]には「影響性」が、[Y:行為描写文]には「意志性」と「影響性」が関与していることを明らかにした。そこでは、はじめに構文の違いがあり、その違いが取りうる動詞の違いに反映すると考えた。構文の違いから出発するという方法は、[2]について考察する場合にも有効である。本研究ではこのようなアプローチを取ることで、先行研究では見逃されてきた事実を解明することができた。

本章は、テアル構文の内的連関をより精密に記述することを目指すものである。はじめに、先行研究の検討をして問題点を明確にする。次に、それを手掛かりにして、前章で「テアル構文を取る」とされた動詞を分析し、その内部での特徴の違いを導き出す。最後に、「動詞の影響性」と「動作主の人称」が関わっていることを明らかにする。

### 4.2 従来分類

従来テアル構文には、「～ガ～テアル」構文になりやすい動詞と、「～ヲ～テアル」構文になりやすい動詞があるとされ、その違いは動詞の「他動性」によって決まるとされてきた。筆者もそれには基本的に異論はない。しかし、問題はその記述がどこまで精密になされているかという点にある。この点で先行研究にはまだ問題点が残されている。体系的な記述を進める手始めとして、本節では従来の説を検討し、研究の指針を定めることにする。

#### 4.2.1 設置動詞 / 処置動詞 / 放任動詞

吉川（1982、1989）は、テアル構文に使われる動詞を3種類に分類している。まず、設置動詞と処置動詞から見ていこう。吉川によるとこの二つの動詞の違いは次の（a～c）のとおりである。

	対象の結果の状態	動作が終わったこと
設置動詞	7時まで店を開けてある。	7時までに店を開けてある。
処置動詞	* 7時まで本を読んである。	7時までに本を読んである。

[表4 - 1]

設置動詞（a）「置く」を場所、様態、関係、状況、目的などで規定したものが  
多い

（b）テアル構文では「対象の結果の状態」、「動作が終わったこと」の両方の意味を表す

（c）「～まで～である」、「～までに～である」の両方が言える  
書く、記録する、入れる、乗せる、掛ける、立てる、積む、  
積み上げる、積み重ねる、揃える、並べる、纏める、広げ  
る、付ける、繋ぐ、貼る、結ぶ、しまう、貯める、残す、  
保存する、捨てる

処置動詞（a）設置動詞以外の動詞

（b）テアル構文では「動作が終わったこと」という意味を表す

(c) 「～までに～である」しか言えない

言う、考える、覚える、知る、調べる、習う

同様に、放任動詞を見ると次の(a～c)のとおりになる。

	放任	*
放任動詞	7時まで放ってある。	* 7時までに放ってある。

[表4 - 2]

放任動詞(a)対象に働きかけないで一定の状態をそのままにすることを表す

(b) テアル構文では「放任」の意味を表す

(c) 「～まで～である」しか言えない

放る、開きっぱなしにする

以上見てきたように、吉川の分類は整然としており、一見テアル構文の全体像を言い表しているように思われるが、次のような問題点がある。

[問題点]

1. 設置動詞/処置動詞の区別は、テアルとテオクにしか関係しない、一般性の低い動詞分類である。しかも、「対象の結果の状態」を表すから「設置動詞」なのか、「設置動詞」だから「対象の結果の状態」と対応するのか明瞭でない。
2. 設置動詞/処置動詞の区別を「～まで」、「～までに」によって規定されるかどうかを求めるだけでは説得力に欠ける。すぐに次のような反例が見つかってしまうからである。

(88) 私は7時(\*まで/までに)手紙を書いてある。

(89) 私は上演する(まで/までに)何回も台本を読んである。
3. 「放任」の意味は本来「放任」動詞に備わっているものであって、テアル自体の意味ではない。
4. 「～ガ～テアル」構文と「～ヲ～テアル」構文の違いについての考察がさ

れていない。

このように、設置動詞 / 処置動詞 / 放任動詞という分類には問題が多い。

#### 4.2.2 益岡(1987)の分類

益岡の分類はすでに2.4で紹介したので詳細は省く。益岡によるとテアル構文はA<sub>1</sub>型からB<sub>2</sub>型まで連続しているとされる。[図2-1]を再掲する。

	A <sub>1</sub> 型	A <sub>2</sub> 型	B <sub>1</sub> 型	B <sub>2</sub> 型
結果性	具体的	-----	-----	抽象的
ガ格	対象	-----	-----	動作主
対象指向性	強い	----- (背景化) -----	-----	ない
行為指向性	弱い	-----	-----	強い
受動的性格	強い	-----	-----	弱い
ラレテアル	許容	-----	-----	不自然
動詞	配置動詞	状態変化動詞	状態存続動詞	基準時における 有効性を示す動詞 (自動詞でもよい)

[図2-1] (再掲)

益岡の分析方法は、ガ格名詞項の性質によってテアル構文を二種類に分類するものであった。この方法はテアル構文の分析の本質を突いたものと言ってよい。しかし、この分類も一見テアル構文の全体像を言い表しているように見えるが、既述のようにいくつかの問題点がある。本章に関する問題としては大きく次の3点があげられる。

#### [問題点]

1. A<sub>1</sub>型からB<sub>2</sub>型まで連続しているというが、事実の指摘に終わりなぜそうなるのかという説明がない。
2. 「(置き)忘れる」、「ついばむ」など意志性は低いがテアル形を取る動詞や、「~/ト/ニ/ ~テアル」構文が扱われていない。
3. 動詞の特徴が構文の相違に反映するとされているが、後で考察するように、

構文の相違が動詞の特徴に反映していると考えられるべきである。

益岡の分類にも問題点はあるが、吉川よりは客観的で説得力のある説明になっている。テアル構文を連続体として捉える手法は本研究でも踏襲するところである。

先の2.5.1でも触れたが、吉川(1973)の分類は恣意的ではあるが、ほぼ益岡の分類に対応しているようである。もちろん、分析方法や構文の捉え方が違うので、完全に等しいというわけではない。[表4-3]に整理して示す。

動詞の分類	吉川	設置動詞		処置動詞 <sup>1</sup>	
	益岡	配置動詞 <sup>2</sup>	状態変化動詞 <sup>3</sup>	状態存続動詞	有効性を表す動詞
意味の分類	吉川	( i )	( ii )	( iii )	
	益岡	A <sub>1</sub>	A <sub>2</sub>	B <sub>1</sub>	B <sub>2</sub>

<sup>1</sup> ( i )、( ii )の意味にもなる。

<sup>2</sup> <sup>3</sup> 状態存続動詞に含まれる。

[表4-3]

#### 4.3 本研究の分類

##### 4.3.1 再び発想の転換

本節では、先行研究での考察を活用しながら、その不備な点を改善していく。まず、分析を方向付ける視点として、ガ格名詞項に「対象」が来るか「動作主」が来るかという点に着目したい。この場合のガ格名詞項はいわゆる「主語」になるもので、一般に「対象」が来れば情景を描写する文に、「動作主」が来れば動作主の行為を表す文になる<sup>1)</sup>。ここで思い出されるのが、3.4で考察した[X :

1) この一文は「ガ格」と「主語」の問題や、文の種類の問題などが関わってくるので、単純にこう結論できるものではないが、ここでの重点は発想の道筋を示すことにあるので、これ以上の深入りはしないことにする。「主語」という用語は、菊地(1984)、角田(1991)を参照した。

情景描写文]と[Y:行為描写文]の違いである。

益岡(1987)は、「～ガ～テアル」構文と「～ヲ～テアル」構文にはいくつかの違いがあることを十分認めながらも、両者を融合することに力点が置かれ、両構文を連続体として捉えることに注意が傾いていた。反面、同じテアル構文がなぜ二つの構文に分かれるのかが見逃されていた。もちろん、益岡はその理由として「対象指向性」と「行為指向性」をあげている。しかし、「指向性」があるからと言っただけでは説明したことにはならない。この二つの「指向性」が何に由来して生じているのかが解明されなければテアル構文の分析が完成したとは言えない。

ここで再び発想の転換を試みよう。本研究では、益岡とは逆に「～ガ～テアル」構文と「～ヲ～テアル」構文の違いを明らかにするところから出発し、それを明確にした上で、取りうる動詞の性質を分析し、両構文の共通性を探っていく。そうして、両構文の連続している様子を浮き上がらせていく。その際、従来の研究ではあまり取り上げられなかった「～ニ～テアル」構文、「～ト～テアル」構文、「～ ～テアル」構文なども見ていく。このような発想でテアル構文を眺めると、新しい事実が浮かび上がってくる。

#### 4.3.2 「情景描写文」と「行為描写文」の分離

まずはじめに、[X:情景描写文]と[Y:行為描写文]の特徴の違いを比較する。(90)の(a)は各描写文の基本的な意味を、(b)は構文の例を、(c)は動詞の特徴を示している。

(90)

[X:情景描写文]

(a) 五感や心によって感覚的に認知した眼前の情景を描写する文

(b) <(対象)ガ (動作主)ニヨツテ ～トイウ状態ニサレテイル>

<(対象)ガ ～トイウ状態ニナツテイル>

<(対象)ガ ～テアル>

(c) 動詞の選択には対象の「影響性」が関与する

[ Y : 行為描写文 ]

( a ) 動作主がした行為を描写する文

( b ) < ( 動作主 ) ガ ( 対象 ) ヲ ~トイウ状態ニシタ>

< ( 動作主 ) ガ ( 対象 ) ニノトノ ~シタ>

< ( 動作主 ) ガ ( 対象 ) ヲノニノトノ ~テアル>

( c ) 動詞の選択には動作主の「意志性」が関与する

( 90 ) と [ 図 2 - 1 ] を比較すると、[ X ] は A 型に、[ Y ] は B 型に対応していることが分かる。前者はガ格に「対象」を取り、「~ガ~テアル」構文になる。話し手が感覚的に認知した「対象」の存在を描写する文なので、「結果性」は具体的になり、「対象指向性」は強くなる。また、そこで描かれる情景は動作主の行為によってなされたものであるが、描写の焦点は「行為自体」ではなく行為を被った「対象」の方にあるため、「行為指向性」は弱く、「受動的性格」は強くなる。一方、後者は「ガ格」に動作主を取り、「~ヲ~テアル」構文になる。描写の焦点は「対象」にではなく「行為自体」にあるため、「結果性」は抽象的になり、「対象指向性」は弱く、「行為指向性」は強く、「受動的性格」は弱くなる。

こうしてみると [ 図 2 - 1 ] の各パラメータの強弱は全て [ X ] と [ Y ] の特徴の違いに帰せられていると言える。「結果性」、「対象指向性」、「行為指向性」、「受動的性格」といった特徴はテアル自体に備わっているのではなく、本来二つの「描写文」に備わっている特徴なのである。益岡の言うように、動詞に「対象指向性」があるから「情景描写文」になり、「行為指向性」があるから「行為描写文」になるのではなく、「情景描写文」だから「対象指向性」が、「行為描写文」だから「行為指向性」が必要とされると考えるのである。一見同じことを言っているようであるが、ここには重大な違いがある。益岡 ( 1987 ) はテアル構文の分析をしているようで、実は二つの「描写文」の違いを指摘していたのである。

#### 4 . 3 . 3 分析

(90) に示したように、二つの「描写文」の描写内容が異なり、各々「影響性」、「意志性」という別個の特徴によって規定されているならば、各々の「描写文」が取る動詞の「内的連関」も異なっていると考えられる。そこで、具体的にどのような動詞が [ X ] になり、また [ Y ] になるのかを調べると、[ 表 4 - 4 ] に示すような結果が得られた。以下 A ~ E の順に動詞の特徴を見ていく。

テアル形になる	~ガ	意志形にならない			(卵を)産む、(エサを)ついでむ、(置き)忘れる	A
					置く、開く、作る、買う、壊す、書く、食べる	B
	~ヲ	意志形になる	命令形になる	禁止形になる	殴る、蹴る、なでる、読む、見る、生かす、呼ぶ、教える、覚える、歌う	C
					着る、脱ぐ、浴びる	D
~トニ				争う、結婚する、触る、昇る、通う、親しむ、協力する、反対する、歩く、走る、行く、座る、寝る	E	

[ 表 4 - 4 ]

[ A ] について

A は「~ガ~テアル」構文になる。「~ヲ~テアル」構文は非文となる

「行為の結果の状態が視覚で捉えられ」れば [ X ] になり、「意志性」は問題にならない。

・「(卵を)産む」、「(エサを)ついでむ」

3.3.3 の [ 検証 5 ] で取り上げたように、(82a) と (82c) の容認度の違いは「行為の結果の状態が視覚で捉えられるか否か」というところにある。

(82再掲) a . アッ、あそこに卵が産んである。 (A) [ X ]

b . ?うちのニワトリは卵を産んである。 (A) [ Y ]

c . \*アッ、あそこでニワトリが鳴いてある。(K) [ X ]



・「(置き)忘れる」

(84a)と(84c)の容認度の違いも、「行為の結果の状態が視覚で捉えられるか否か」にある。

(84再掲) a . オヤ、弁当が忘れてある。 (A) [ X ]

b . \*うちの娘は弁当を忘れてある。 (A) [ Y ]

c . \*オヤ、企業秘密が知ってある。 (H) [ X ]

(82a)、(84a)を「～ヲ～テアル」構文にすると(82b)、(84b)のようになる。これは[ Y ]の解釈となる。影響性は高いが意志性が低いので非文となる。

[ B ]について

Bは「～ガ～テアル」構文にも「～ヲ～テアル」構文にもなる

・「置く」、「開く」、「作る」、「買う」、「壊す」、「書く」、「食べる」

BもAと同じように、「行為の結果の状態が視覚で捉えられる」という点に特徴がある。Aとは「人間の意志的な行為」によるという点で異なる。だから、「(無意識に)置く」とか「(うっかり)壊す」など無意志的な動作を表す場合はAと差がないことになる。

(91) a . マネキネコが作ってある。 [ X ]

b . マネキネコを作ってある。 [ Y ]

(92) a . マネキネコが壊してある。 [ X ]

b . マネキネコを壊してある。 [ Y ]

[ C ]について

Cは「～ガ～テアル」構文が取りにくく、「～ヲ～テアル」構文を取りやすい

・「殴る」、「蹴る」、「なでる」、「読む」、「見る」、「生かす」、「呼ぶ」、「教える」、「覚える」、「歌う」

これらはBよりも相対的に「行為の結果の状態が視覚で捉えにくい」という点

に特徴がある。Bと異なるのは、「行為の結果」の捉えやすさが相対的に低いという点である。次の例文を見てみよう。

- (93) a . マネキネコが蹴ってある。 [ X ]  
b . マネキネコを蹴ってある。 [ Y ]  
(94) a . マネキネコがなでてある。 [ X ]  
b . マネキネコをなでてある。 [ Y ]

(93)、(94)を(91)、(92)と比べると、(93a)、(94a)の場合、「蹴ってマネキネコが壊れた」とか「なでて色が変わった」など目で見て察知できる状況があれば、どちらも [ X ] になる。通常、蹴った方が形跡が残りやすいので「蹴る」の方は [ X ] になじみやすいが、「なでる」は形跡が残りにくいいため [ X ] とはなじみにくいのである。 [ Y ] の場合は、動作主の「意志性」さえあれば形跡が残っていなくても構わないので、(93b)、(94b)とも成立する。このようにB、Cは、截然と分かれたるものではなく、「置く」のように行為の結果の状態が視覚的に察知されやすいものから、「歌う」のように察知されにくいものまで連続しているのである。

なお、「視覚で捉えられる」と言い切るのには無理が残る。(95)～(99)のように、視覚以外の感覚が関わる場合もあるからである。

- (95) イチローの部屋はいつもクラシックがかけてある。 (聴覚)  
(96) エミリーの部屋はいつも香が焚いてある。 (臭覚)  
(97) ヒョンソンの料理は唐辛子味が付けてある。 (味覚)  
(98) 安養寺あんにようは廊下が滑って転ぶほどツルツルに磨いてある。 (触覚)  
(99) イカサマ神殿にはえも言われぬ雰囲気が漂わせてある。 (心理)

先行研究でもしばしば「視覚可能な形」などの表現が使われていた。しかし、単にそれは日常生活の中で、視覚によって変化を感じ取ることが多いというだけのことである。上の表現をより正確に言えば、「行為の結果が、五感や心でもって感覚的に認知できる形」ということになる。

〔D〕について

Dは「～ガ～テアル」構文が取りにくく、「～ヲ～テアル」構文を取りやすい  
・「着る」、「履く」、「脱ぐ」、「浴びる」

これらは一般に「再帰動詞」と呼ばれるものである<sup>1)</sup>。「再帰動詞」は意味的に、「行為が対象(=動作主)に向かう」という点では他動詞的であり、また、「行為が動作主以外には及ばない」という点では自動詞的でもある<sup>2)</sup>。「再帰動詞」で重要なのは、「動作主」が行為の影響を受ける「対象」でもあるということである。Dは「行為の結果の状態」が視覚で察知できるという点でBと連続している。Bと異なるのは、動作主の「行為の結果」が動作主自身に戻ってくるという点であり、この点ではEと連続している<sup>3)</sup>。(100)で、行為は「ユニホーム」や「シャワー」にも及ぶが、動作はそれだけでは完結せず、動作主である「イチロー」に及んではじめて完結する。

- (100) a . イチローがユニホームを着る。  
b . イチローがユニホームを脱ぐ。  
c . イチローがシャワーを浴びる。

再帰動詞構文は日本語の動詞構文の中でも、特異な現象を起こすことで知られているが、テアル構文でも次のような現象を見せる<sup>4)</sup>。

- (101) a . (試合のために)私はユニホームを着てある。 [ Y ]  
b . (洗濯のために)私はユニホームを脱いである。 [ Y ]

---

1) 仁田(1982)の定義によると、再帰動詞とは「動作性の働きかけが、他の存在ではなく、常に動作主自身に及ぶことによって、動作が終結するのが、この種の動詞である」とされている。本研究でもこの定義に従うことにする。  
2) ここで言う「他動詞」、「自動詞」という用語は、「動作主の行為が他に及ぶ動詞」、「及ばない動詞」というほどの意味である。  
3) 再帰的構文は一般に主語は「人間」であるが、西尾(1992)に「草木」が主語になった場合の再帰的構文についての論考がある。  
4) テイル、テアルに関するものでは、仁田(1982)、工藤(1991)、金水(1994)がある。

- c . (眠気覚ましに)私はシャワーを浴びてある。 [ Y ]
- (102) a . (試合のために)エミリーはユニホームを着てある。 [ Y ]
- b . (洗濯のために)エミリーはユニホームを脱いである。 [ Y ]
- c . (眠気覚ましに)エミリーはシャワーを浴びてある。 [ Y ]
- (103) a . エミリーはユニホームを着ている。 [ X ]
- b . エミリーはユニホームを脱いでいる。 [ X ]
- c . エミリーはシャワーを浴びている。 [ X ]
- (104) a . ?ユニホームが着てある。 [ X ]
- b . ユニホームが脱いである。 [ X ]
- c . \*シャワーが浴びてある。 [ X ]

再帰動詞構文をテアル構文にすると(101)になる。(101)の「私」は、「動作主」であると同時にユニホームを着せられた「対象」でもあるので、[ X ]の解釈にも[ Y ]の解釈にもなりそうである。しかし、現実には「何かの目的のために～しておいた」という[ Y ]の解釈にしかない。[ Y ]は話し手の行為(疑問文では聞き手の行為)を表すのに使われるが、(102)のように第三者の行為を表すのに使われることもある。その場合、話し手が動作主に感情移入して、動作主の立場から行為描写をしているようなニュアンスになる。これは、「行為描写」というものが基本的に話し手自身の行為を描写することに起因する。話し手以外の人物の行為は、話し手自身によって直接経験することは不可能なので、一度視覚などの感覚によって「情景」として捉えたのち、動作主の「行為」として認識されるのである。こうしてみると、他者の行為は[ X ]として表現するのに適していると言える。しかしそこをあえて[ Y ]として表現すると、動作主が話し手の領域に入っているかのようなニュアンスを与えることになるのである。試みに(102)の「エミリー」を「うちの子」および「よその子」で置き換えてみると、相対的に話し手の領域に近い「うちの子」の容認度が高くなることが分かる。このように、テアル構文には、語用論的な要素も関わっていると考えられる。

再帰動詞構文が[ X ]の解釈を受けるのは、(103)と(104)の場合である。動作主を主語にしてその情景を述べるには、(103)のようにテイル構文にしなければならない。また、(104)のように「ユニホーム」や「シャワー」なら、それ

をガ格に取って「～ガ～テアル」構文を作ることができる。(b)は、話し手が脱ぎ捨てられたユニホームを視覚的に捉えてその情景を述べた文である。(a)も「ユニホームに汚れが付いている」など視覚的に「着た」ことが捉えられる状況があれば適切な文になる。しかし、エミリーが今現在ユニホームを着て歩いている場面で、そのユニホームの情景を描写することはできない。(c)は非文になる。ここにも、語用論的な要素が見られる。

それにしても、(101)と(102)の主語は、「動作主」であると同時に、行為の影響を受ける「対象」でもあるのに、何ゆえに[X]の解釈にならないのであろうか。この現象は、実は再帰動詞構文の動作主と動作の受け手が同一人物であるためである。ここで(90b)を振り返ってみよう。

(90一部再掲)

[X：情景描写文]

(b) <(対象)ガ (動作主)ニヨッテ ～トイウ状態ニサレテイル>  
 <(対象)ガ ～トイウ状態ニナッテイル>  
 <(対象)ガ ～テアル>

[Y：行為描写文]

(b) <(動作主)ガ (対象)ヲ ～トイウ状態ニシタ>  
 <(動作主)ガ (対象)ニノトノ ～シタ>  
 <(動作主)ガ (対象)ヲノニノトノ ～テアル>

(101)と(102)の「私」、「エミリー」は、(90b)に当てはめて考えると、[X]の「対象」とも[Y]の「動作主」とも解釈できる。しかし、言語には「動作主(Agent)は基本的に主語として具現される」、「対象(Theme)は基本的に目的語として具現される」(影山1993)という性質がある<sup>1)</sup>。日本語では普

1) 影山は Perlmutter and Postal (1984) の「普遍的配列の仮説 (Universal Alignment Hypothesis)」を受けてこう説明している。この点で筆者も影山に賛成である。ただ、このような性質があるからそうなるというだけでは説明不足である。なぜ、そのような性質があるのかまで説明しなければ、説明したことにはならないのである。筆者には、現段階ではまだそれに答えることはできない。

[普遍的配列の仮説：項が担う文法関係は、それが用いられる文の意味から一定の普遍的対応規則によって予測できる。(影山1993：43-44から抜粋)]

通、主語はガ格、目的語はヲ格で表される。逆に言えば、有情物を主語にした能動文で「～ガ～ヲ」構文を取ると、ガ格の位置に来た名詞（エミリー、私）は動作主として、ヲ格の位置に来た名詞（ユニホーム）は対象として解釈される<sup>1)</sup>。そのため(101)、(102)は[ Y ]の解釈になるのである。

[ E ]について

Eは「～ガ～テアル」構文が取りにくく「～ト/ニ/～テアル」構文を取りやすい。第3章で取り上げた(64 a～g)はここに分類される

・～ト「争う」、「結婚する」

これらは「対称動詞」と呼ばれるもので、ト格には「相手」がくる。(105 a)のガ格、ト格を主語にしてテアル構文を作ると(b)、(c)のようになる。(b)、(c)は非文に取られやすいが、「今裁判をしておかないと後々不利益が生じるため」とか、「結婚詐欺で金をせしめるため」のようなシチュエーションが想定されれば適切な文となる。

(105) a . イチローはエミリーと争った<sup>2)</sup> / 結婚した。

b . イチローはエミリーと争ってある / 結婚してある。 [ X Y ]

c . エミリーはイチローと争ってある / 結婚してある。 [ X Y ]

(b)と(c)の違いは、話し手の視点が「イチロー」から「エミリー」に移ったことにある。これまで見てきた「～ガ～ヲ～テアル」構文のような[ X ]と[ Y ]の違いではない。それならば(b)と(c)は[ X ]なのであろうか[ Y ]なのであろうか。答えは一概に決められない。視覚などによって察知した情景を述べたと文と解釈すれば[ X ]であろうし、動作主に視点を置いてその行為を述べた文と解釈すれば[ Y ]になる。これは、話し手の気持ちが動作主に感情移入

---

1) 受動文では、「エミリーがイチローによってユニホームを着せられた」のように、ガ格には「対象」が来る。無情物を主語に取る文は、「台風が木々をなぎ倒した」のようにガ格が「動作主」として解釈される場合も、「雲気が灯いた」のように解釈されない場合もある。

2) この文は「イチローとエミリーが互いに争った」とも「イチローとエミリーが協力して別の相手と争った」とも解釈できる。

しやすいか否かによって決まるので、「イチロー」や「エミリー」が自分の家族なら [ Y ] と解釈されるであろうし、赤の他人なら [ X ] と解釈されるであろう。もし動作主が「私」だったら、話者である自分自身の主観が入るので [ Y ] に解釈されやすいが、自分の境遇を客観的に述べたとすれば [ X ] と解釈することも可能である。ここにも語用論が関与している。

・～ニ「触る」、「昇る」、「通う」、「親しむ」、「協力する」、「反対する」  
これらは対象が「物あるいは事象」なのか「人」なのかによって違いがある。「触る」は(106)では「物」を、(107)では「人」を「対象」に取っている。

- (106) a . (御利益のために)私はマネキネコに触った。  
b . (御利益のために)私はマネキネコに触ってある。 [ Y ]  
c . マネキネコが触ってある。 [ X ]
- (107) a . (御利益のために)私はタカノハナに触った。  
b . (御利益のために)私はタカノハナに触ってある。 [ Y ]  
c . タカノハナが触ってある。 [ Y ]

(106)では(b)が [ Y ]、(c)が [ X ] という意味になるが、(107)では(b)は(106)と同様に [ Y ] の意味になるが(c)は、「タカノハナ」が触られた「対象」であるということが視覚的に察知できるというシチュエーションがなければ [ Y ] と解釈されてしまう。ここにもガ格名詞項が「対象」としてではなく、「動作主」として解釈される例が見られる。

・～ヲ「歩く」、「走る」、「行く」

これらは「道を」、「草原を」などのように「ヲ格」を取るが、これは「経過域」を表す<sup>1)</sup>。「経過域」は「対象」と連続しており、互いに完全に独立したものではない。しかし、「道を蹴る」と「道を走る」の二つを比較すると、同じ「道を」にも違いが見られる。意味の面から見ると、前者の「道」は「働きかけの受け手」であるのに対し、後者は単に「行為の行われる場所」を表すにすぎな

---

1) 「経過域」という用語は仁田(1993)による。

い。統語的には、前者の「道を」は必須補語であるのに対し、後者は必須補語ではない。「走る」をテアル構文にすると次のようになる。

- (108) a . 私は毎日 10 kmの道を走った。  
b . 私は毎日 10 kmの道を走ってある。 [ Y ]  
c . \* 10 kmの道が走ってある。 [ X ]

(108 a) の「動作主」と「経過域」を主語にしてテアル構文にすると (b)、(c) となる。形式上 (b) は [ Y ]、(c) は [ X ] の解釈になる。(b) は適切な文になるが、(c) は視覚的に対象の変化を見ることができないので非文となる。

なお、「行く」は「シルクロードに行く」のように「二格」を取ることもある。

・ ~ 「座る」、「寝る」

これらは「椅子に座る」や「ベッドに寝る」のように「二格」を取ることもあるが、必修名詞項ではないので、単に「座る」、「寝る」と言ってもよい。主語は「動作主」であり、かつ動作の影響を受ける「対象」でもある。

- (109) a . 私 / イチローは立っていると疲れるので座ってある。 [ Y ]  
b . 私 / イチローは立っていると疲れるので座っている。 [ X ]  
(110) a . 私 / イチローは疲れを取るためにぐっすり寝てある。 [ Y ]  
b . 私 / イチローは疲れを取るためにぐっすり寝ている。 [ X ]

(109 a)、(110 a) の「私 / イチロー」は「主語」としての解釈を受けるため [ Y ] の解釈になる。情景描写を表す [ X ] にするには (109 b)、(110 b) のように「テイル構文」にしなければならない。この場合、主語に一人称 (私) が来ると不自然な文になる。これは通常話し手が自分の姿を目撃して描写することがないためである。しかし、ビデオに映っている自分の姿を見て言うことは可能である。ここにも語用論的な要素が関わっている。



Eは「再帰的」な意味を担っている。動作主の行為の影響は「他者」にも及ぶが、それよりも重要なのはその動作が動作主自身に戻ってくることにある。よって、Eも「再帰動詞」の一種である。この点でDの「再帰動詞」と連続している。もちろん「再帰性」というのも「他動性」と同じように程度問題で、「触る」のように「行為の対象が動作主以外にある」といった再帰性の低いものから、「寝る」のように「動作主自身に行為が及ぶ」といった再帰性の高いものまでである。

「再帰性」ということでもう一つ付け加えておく。「再帰性」という概念を広く捉えれば、動作主自身に影響が及ぶ行為は全て「再帰性」があるということになる。そのため、B、Cの動詞が「再帰的」な意味を担うこともある。たとえば、「私は髪を切った」とか「私は足を折った」などの場合である。この点でB、C、D、Eは連続していると言える。

#### 4.3.4 「人称制限」と「感情移入」

本研究では「人称制限」、「感情移入」という用語を使っているが、ここでこれらについて整理しておく。

まず、「人称制限」から説明する。たとえば、針で顔を突くと人間は「痛い！」と感じる。突かれたのが自分自身ならば、直接「痛い！」と感じることができるが、それが他人であると直接感じることはできず、「痛そうだ！」と推定することしかできない。このように、一人称と二/三人称では認知のされ方に違いがあるが、日本語ではこの違いが言語形式の違いとして現れることがある。(111)はその例である。

(111) a . 私は結婚し(たい / \*たがっている)。

b . あなた / 彼は結婚し(\*たい / たがっている)。<sup>1)</sup>

また、形式上同じ形を取っていても、一人称と二/三人称では意味の異なる場合

---

1) 疑問文では二人称にも「タイ」がつくが、三人称にはつかない。  
(i) あなたは結婚し(たいです / \*たがっています)か。  
(ii) 彼は結婚し(\*たいです / たがっています)か。

もある。次の二文を比較してみよう。

- (112) a . 私は結婚しようと思う。  
b . おそらく、あなた／彼は結婚しよう。

「～シヨウ」の形は、一人称を動作主にする（a）では「意志」を表すのに対し、二／三人称を動作主にする（b）では「推量」の意味に解釈される。こういった現象の生じる原因は、前者が自己の経験や行為として直接認知できるのに対し、後者では一度「針で突かれた情景を見る」とか、「結婚しそうだという様子を見る」などの処理をしたのちに、間接的に認知することしかできないといったところにある。このように「直接認知」、「間接認知」の違いによって、ある文が一人称を取るか二／三人称を取るかという違いが、本研究でいう「人称制限」である。

次に「感情移入」について説明する。手に針を刺した場合、自分自身の手なら「痛い!」と感じるが、他人の手であってもその痛さを間接的に感じ取ることができる。しかし、それが人間の手ではなくゴキブリの足であったら、多くの人はいあまりその痛さを感じないであろう。赤の他人の犯罪よりも、身内の犯罪の方がうしろめたく感じるのも同じことである。これは、同じく「他者」であっても、それに共感しやすいかどうかによって異なるためである。一般に、話し手が心理的に近いと感じているモノほど、そのモノの経験や行為を自己のものとして感じ取りやすい。このように、他人の経験や行為を自分のものとして感じ取ることを、本研究では「感情移入」という。

日本語では話し手に近いかどうかということと言語形式の違いによって表すことがある。次の例を見てみよう。

- (113) a . \*私があなたにプレゼントをくれた。  
b . あなたが私にプレゼントをくれた。  
c . あなたがうちの子にプレゼントをくれた。  
d . \*うちの子があなたにプレゼントをくれた。

授受動詞の「くれる」は、他者から話し手に向かって物が移動することを表すので、(a)は非文となり、(b)は適切な文となる。(c)の「うちの子」は「話し手」ではないにもかかわらず適切な文となっているが、これは「話し手」が「うちの子」のことを心理的に近く感じ、自分の領域として捉えているためである。(d)の「あなた」は「うちの子」に比べて「感情移入」がされにくいので、非文となる。(d)の「くれる」を「あげる」に変えると適切な文となる。

以上論じた「人称制限」と「感情移入」はテアル構文にも関係してくる。話し手自身の行為は「直接認知」が可能のため[Y:行為描写文]になりやすく、他者の行為は「間接認知」となるため[X:情景描写文]となりやすい。次の例文を見よう。

- (114) a . アッ、こんなところにバットが置いてある。[X]  
b . トレーニングのためにバットを置いてある。[Y]

両構文とも動作主が表面上には現れていないが、通常の解釈では(a)は話し手以外の誰か、(b)は話し手自身の行為となる。

このように、テアル構文にも基本的に「人称制限」があるが、絶対的なものではなく、シチュエーションによっては制限の弱まることもある。

- (115) a . こんなところにバットが置いてある。そういえば昨日自分でおいたんだっけ。[X]  
b . イチローはいつもトレーニングのために、バッティングセンターに自分専用のバットを置いてある。[Y]

(a)は[X]であるにもかかわらず、「動作主」は話し手自身である。しかし、「置いてある」と言った時点では、自己の行為とは思っていないのである。

(b)は話し手がイチローに心理的に近い人物であるという印象を受ける。話し手が「イチロー」に関心を持っていないとすれば、「置いている」のように「テイル形」にする方が自然である。「置いてあるようだ」のように「推量」の意味の場合や、「置いてあるそうだ」のように「伝聞」の意味の場合は、「話し手の

直接認知」という意味合いが薄れるので、許容度が高くなる。小説などでは、著者が作中人物の視点に立って(115b)のように描写することがある。

こういった「人称制限」や「感情移入」が生じるのは、名詞自体の意味によるものではなく、語用論的な要素によるものである。言語を研究する場合、語用論的な要素を考慮することが大切であるが、テアル構文の場合も、それが重要な役割を果たしているのである。

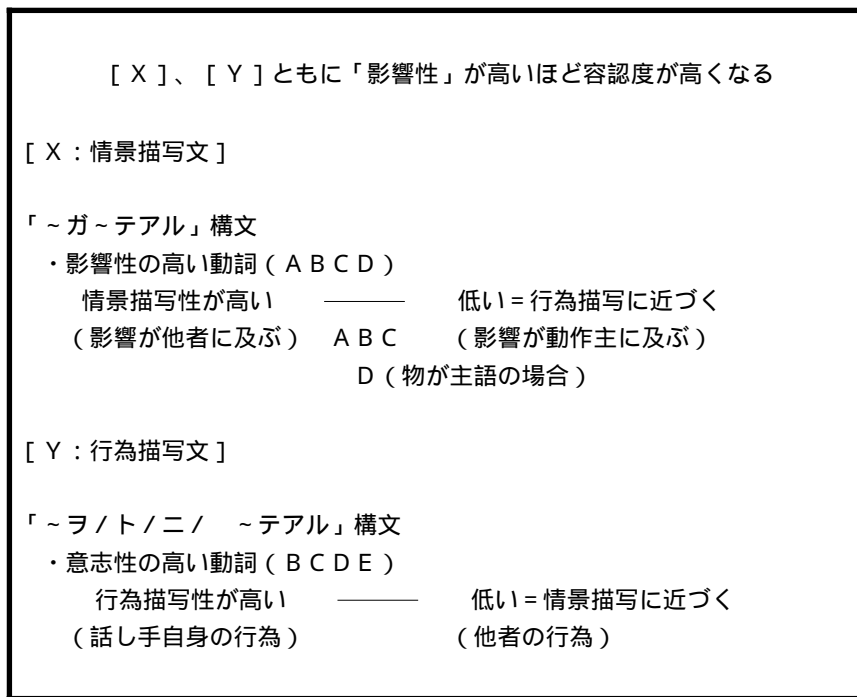
#### 4.4 第4章のまとめ

[X:情景描写文]は影響性の高い動詞(A、B、C、D)を取る。影響性が高い動詞ほど[X]になりやすく、低い動詞ほど[X]になりにくく[Y]になりやすい傾向がある。Dは「物」が主語の場合に[X]になる。[Y:行為描写文]は意志性の高い動詞(B、C、D、E)を取る。動作主が話し手自身の場合には[Y]の解釈が得やすいが、動作主が話し手の関心から遠ざかるにつれ、[X]の解釈に近づいていく。

本章の考察によると、[X]と[Y]は決して二つの相異なる構文ではなく、一つのつながりを持ったものだと考えられる。この点で、吉川や益岡が論及していたようにテアル構文を「連続体」として捉える考え方は正しかったのである。しかし、本研究における「連続体」は吉川や益岡の言う「連続体」とは異なる。彼らの場合はテアルの内的連関を、本研究でいう「影響性」の違いによってのみに求めている([表4-3]参照)。それに対して本研究では、「動作主の人称」もテアル構文の内的連関に重要な役割を果たしていることを新たに付け加えた。

要するに、テアル構文の内的連関は、接続する動詞の「影響性」と動作主の「人称」(あるいは、話し手の動作主に対する関心度)によって、[X]として解釈される場合と[Y]として解釈される場合があるということである。「人称」については5.2.1で詳しく論じる。

本章で考察してきたことを[図4-1]にまとめる。



[ 図 4 - 1 ]

本研究で提示した例文を含め、容認度は人によって差がある<sup>1)</sup>。たとえば、「寝てある」、「触ってある」などの文は如何なるシチュエーションを想定しても不自然だとする人もいる。そうであるからと言って、本研究の分析が誤っているとする理由にはならない。なぜならば、[ 図 4 - 1 ] に示した動詞は、どの話し手にとってもテアル形になるという必然性はないからである。事実として、話し手によってテアル形を取りうる動詞に幅はある。しかし、相対的に「影響性」の高い動詞ほど許容度が上がるという傾向はあるようである。本研究では容認度にゆれのある部分にまで踏み込んで分析したわけであるが、そのゆれは無秩序に発生しているわけではなく、「影響性」という一定の基準に従っていると考えられる。

1) 筆者は出生以来26年間、愛知県の西尾張にある一宮市に住んでいる。この地域では、テアルを「～シタル」の形で使い、「目的」の意味の加わるシチュエーションでは、「影響性」の低い動詞でもテアル形を取ることができる。

## 第 5 章 テアル構文の名詞項

### 5.1 テアル構文の名詞項

第 3 章と第 4 章の考察から、テアル構文の意味には動詞の特徴が関与していることが明らかになった。しかし、それに関与している要素は他にもある。本章では、名詞項の人称や有情 / 非情もテアル構文の意味に重要な役割を果たしていることを明らかにする。すなわち、動作主や対象に何が来るかによって、テアル構文の意味に違いが生じるのである。

### 5.2 各論

#### 5.2.1 動作主の人称

先に (101)、(102) は [ Y ] の解釈になると論じた。しかし、もう少し詳しく見ていくと、両者には微妙に差のあることに気付く。両者を比較すると、(101) は一般に [ Y ] の解釈にしかならないのに、(102) は [ Y ] の解釈にも [ X ] の解釈にもなる。この違いはすでに幾度となく指摘したように、主語が「話し手自身」であるか「話し手以外」であるかの違いによる。

ここで二つの描写文の基本的な意味を確認しておく。(90a) を振り返ってみよう。

(90一部再掲)

[ X : 情景描写文 ]

( a ) 五感や心によって感覚的に認知した眼前の情景を描写する文

[ Y : 行為描写文 ]

( a ) 動作主のした行為を描写する文

話し手が自分自身の行為について語る時は当然「行為描写文」を使うことができる。しかし、他人の行為について語る時は、まずその行為を視覚などによって「情景」として確認した後、はじめてその人の「行為」として語るができる。そのことから考えると、他人の行為は「情景描写」として表しているとも言えるわけである。ところが、その人に特別思い入れがある場合などは、その人に「感情移入」してまるで自分の行為のように「行為描写」として表すことができるのである。逆に自分の行為でも、客観的に描写しようとするれば「情景描写文」になる。

「情景描写文」と「行為描写文」は、截然と二分されるものではなく、片方のプロトタイプからもう片方のプロトタイプまで連続しているのである。そのため、形式上「～ガ～テアル」構文を取っていても「行為描写文」と捉えられたり、「～ヲ～テアル」構文を取っていても「情景描写文」と捉えられたりすることもある。場合によっては、どちらの描写文とも決めかねることもある。

このように、主語の性質と描写文の種類の関係は、基本的には主語が三人称の場合は「情景描写文」に、一人称（疑問文では二人称）の場合は「行為描写文」になる傾向がある。ただし、両構文はプロトタイプ的なものを両端として一つにつながっているのである。

## 5.2.2 「対象」が「有情名詞」か「非情名詞」か

多くの再帰動詞は(116)のような動詞の体系をもっている<sup>1)</sup>。

(116) a .	着る	脱ぐ	浴びる
b .	着せる	脱がす	浴びせる
c .	着させる	脱がせる	浴びさせる

これをテアル構文にすると(117)のようになる。

---

1) 奥津(1984)、井上編(1989)(奥津担当分)では、(116 a)を「単他動詞」、(b)を「複他動詞」、(c)を「使役」と呼んでいる。

- (117) a 1 . 私はユニホームを着た。
- 2 . 私はユニホームを着てある。 [ Y ]
- 3 . ユニホームが着てある。 [ X ]
- b 1 . 私はイチローにユニホームを着せた。
- 2 . 私はイチローにユニホームを着せてある。 [ Y ]
- 3 . イチローにユニホームが着せてある。 [ X ]
- 4 . イチローが ユニホームを着せてある。 [ Y ]
- 5 . イチローがユニホームを着せられている。 [ X ]
- c 1 . 私はイチローにユニホームを着させた。
- 2 . 私はイチローにユニホームを着させてある。 [ Y ]
- 3 . イチローにユニホームが着させてある。 [ X ]
- 4 . イチローが ユニホームを着させてある。 [ Y ]
- 5 . イチローがユニホームを着させられている。 [ X ]

(117) で特に注意を要するのは ( b 4 ) と ( c 4 ) である。両文とも「イチロー」は、「ユニホームを着ている人」とは解釈できず、( 2 ) の「私」と同じく「着せた人」としか解釈できない。( 1 ) の二つの「対象」を主語にしてテアル構文を作った場合、目的語が「非情名詞」の場合は [ X ] になるが、「有情名詞」の場合は「動作主」として解釈されてしまうので [ Y ] の解釈にしかならないのである。( 5 ) のように「ラレテイル」構文にすれば、「ユニホームを着ている人」という解釈になる。このような現象は使役文、受動文、テイル構文とも関わってくるので、これ以上の深入りはしないことにする。

### 5 . 2 . 3 情景描写文のガ格の制限

益岡 (1987) は、A 型のテアル構文 (本研究の「情景描写文」に相当する) の場合、「ガ格に現れる典型的な名詞は非情名詞である」と論じている。しかし、「ただし、次の例のように非情名詞でない場合もある」として、( 33 ) ~ ( 36 ) の例をあげている。



(33) 馬が放ってある。 [ X ]

(34) 犬が鎖につないである。 [ X ]

(35) ?人が鎖につないである。 [ X ]

(36) ?生徒が廊下に立たせてある。 [ X ]

( (33) ~ (36) 再掲 )

(33)、(34)の文が適切な文であることから、「動物はガ格名詞項に現れる」としてよさそうである。問題は「人間」がガ格名詞項に現れるかどうかである。(35)、(36)を見ると、たしかに「人間」は現れにくく思われる。こうしてみると、A型ではガ格に「人間」が現れない理由があるはずである。そこで、その理由を調べてみると、(35)と(36)は異なる要因から不適切さの生じていることが分かる。

まず、(35)で「人」を「奴隷」に変えてみよう。

(118) 奴隷が鎖につないである。 [ X ]

(118)は完全に適切な文として容認できる。こうしてみると、格別「ガ格が人間ではいけない」というわけでもなさそうである。しかし、それでも(35)は不自然な文に思われる。益岡は(35)の「テアル」を(119)のように「受動形+イル」にすれば許容されると論じている。

(119) 人が鎖につながれている。 [ X ]

「奴隷」は「テアル」を付けてもよいが、「人」は「ラレテイル」にしなければならない理由はどこにあるのか。これは結局、「ラレテイル」には「被害」のニュアンスが加わっていることと関係がある。人間が鎖に繋がれている情景に出会えば、同情して繋がれた人の立場に立ってものを見る。繋がれた人の立場に立てば、その状態は「被害」として受け取られる。そのため、「被害」のニュアンスを持った「ラレテイル」が用いられる。逆に言えば、「テアル」は眼前の情景を客観的に描写するだけで、「ラレテイル」にみられる主観的な「被害」の意味

は含まれていない<sup>1)</sup>。そのため、「物」扱いされる「奴隷」の場合はテアルの容認度が高くなる。(35)も、その人物に対する主観的な感情を入れなければ、適切な文として解釈できるのである。

一方、(36)は「生徒」を「奴隷」に変えても非文のままである。

(120) ? 奴隷が廊下に立たせてある。[ X ]

(36)を適切な文にするには、(121)のように「テアル」を「受動形+イル」に変えなければならない。

(121) 生徒が廊下に立たされている。[ X ]

ところが、(36)の「生徒」を「先生」に変えると(122)に示すように容認度が増してくる。

(122) 先生が(生徒を)廊下に立たせてある。[ Y ]

これは、「立たせる」という動詞が「使役形」であることと関係がある。使役の場合、「ガ格」に現れるのは「~サセル人」であって、「~サレル人」は「ヲ格」に現れる。そのため、ガ格に立つ人間は「使役者」(~サセタ人)と解釈されてしまうのである。(36)も「ある生徒が誰かを立たせた」という意味ならば可能である。ただし、この場合「A型」(情景描写文)としてではなく、「B型」(行為描写文)として解釈される。また、(35)の「人」も「つなぐ」の動作主

---

1) 次のように、「ラレテイル」にも「被害」の意味の加わらないものもある。

( i ) この本は多くの人に読まれている。

( ii ) イチローは監督にほめられている。

しかし、この文と(119)とでは相違点がある。( i )、( ii )では動作主が「二格」によって表示されるのに対し、(119)では動作主を「二格」によって表示することができない。(119)の場合、「何者かによって」のように「ニヨツテ格」にしなければならない。このように、テアル形の分析には受動形の分析も必要となってくるが、これは本研究の考察範囲を越えるため、これ以上の深入りはしないことにする。

として解釈することができる。

なお、(121)が成立する理由は、「受動形」では「ガ格」に現れるのは「～ラレル人」であって、「～サセル人」は表層に現れないためである<sup>1)</sup>。

以上の考察から、「情景描写文」のガ格は「非情名詞」とは限らないことが明らかになった。ただし、使役構文ではガ格に「人間」が立った場合「使役者」として解釈されるため、非文となる。

#### 5.2.4 ~八~ガノヲ~テアル

Ono (1982) は、一般には(123)は非文法的で(124)のようにするのが正しいとされているが、(126)が適切な文であるように、(123)も文法的に正しいと論じている。

(123) (1) 花子は子供が寝かせてあった。 [ X ]

(124) (2) 花子は子供を寝かせてあった。 [ Y ]

(125) (3 a) 僕は宿題を済ませてある。 [ Y ]

(126) (3 b) 僕は宿題が済ませてある。 [ X ]

筆者も(123)は適切な文だと判定する。ただし、(125)と(126)がほぼ同じ内容のことを述べているのに対し、(123)と(124)では少し意味が違ふと考える。まず、(125)と(126)から見ていこう。これまでの本研究の考察によると、両文は同じ事実を(125)は「行為描写文」で、(126)は「情景描写文」で述べており、両文とも動作主「僕」の行為の結果を表していることになる。

一方、(124)は、子供を寝かせたのは「花子」とであると解釈されるが、(123)で子供を寝かせたのは「花子」でもよいが、他の人物、たとえば「ベビーシッター」でもよい。「花子は」と主題を提示しておいて、その赤ちゃんの状態を述べた文である。もう一度(126)を見よう。先に(126)の動作主は「僕」とすると

---

1) 「受動文」、「使役文」のテアル構文についても精密な考察をするべきではあるが、「受動文」、「使役文」自体の考察も必要となり議論が複雑になるため、本研究ではこれ以上深く立ち入らないことにする。

したが、これは普通宿題は自分でやるものだと思われているからである。もし仮に、他の人にやってもらったとしても(126)は成り立つ。しかし、(125)は動作主自身がやり遂げたという解釈になる。もっとも、こういった解釈は傾向性の問題で、(124)、(125)の行為が必ず「～ハ」に立つ人間によってなされたとは限らない。

以上の考察により、「～ハ～ヲ～テアル」構文は「行為描写文」を表し「～ハ」に立つ人物は「動作主」として解釈され、「～ハ～ガ～テアル」構文は「情景描写文」を表し「～ハ」に立つ人物は文の主題ではあるが「動作主」として解釈されるとは限らないという傾向があることが分かった。

### 5.2.5 「目的」

寺村(1984)は、眼前の状態をそのように客観的に描くとき(=本研究の[ X : 情景描写文 ])には「目的」の意味がある場合もない場合もあるが、処置が自分自身の行為または自分の差配による誰かの行為のとき(=同[ Y : 行為描写文 ])では「目的」という意味が強くなる、と指摘している。

このことは、本研究によれば次のように説明できる。[ X ]は「眼前の状態」をありのままに述べた文である。その状態は「自然にそのようにある」と捉える場合と、「何者かの力によってもたらされた」と捉える場合とがある。後者の「何者か」とは「自然の力」の場合もあれば「人間や動物」の場合もある。また、アスペクトの観点から見ると、その行為が未然のものか、進行中のものか、已然のものかなどによって分類される。このうち、話し手が眼前の情景を「ある動作の結果の状態が人間や動物の力によってもたらされた」と捉えた場合にテアル構文になる。その行為は「意志的」になされた場合もあれば、「無意志的」になされた場合もある。人間や動物が意志的に何か行動をするのは、多かれ少なかれ何かの目的のために行われる。そのため、「何かの目的のため」というシチュエーションがあれば、「目的」の意味が加わるのである。しかし、[ X ]は特に「何かの目的のために行った行為」を描写する文ではないので、「無意志的」行為の場合や意志的な行為でも格別「何かの目的のため」というシチュエーションがなければ、「目的」の意味は加わらないのである。

なお、5.2.3で考察したように、人間の行為による場合でも「テアル」ではなく「ラレテイル」を取ることがある。「被害」の意味が加わった場合である。テアル構文では動作主が表面に現れないが、ラレテイル構文では動作主が「ニヨッテ格」に現れる。

一方、[ Y ]は動作主の行為を描写する文である。動作主の行為は「意志的」な場合も「無意志的」な場合もある。意志的行為の場合は、何かの「目的」のために行われるのであるが、話し手がその行為を「目的」のためであることを聞き手に積極的に伝えようとする場合とそうでない場合とがある。また、アスペクトの観点から見ると、その行為が未然のものか、進行中のものか、既成のものかなどによって分類される。テアル構文はこのうちの「動作主が意志的に行った行為の結果（既成）を、『何かの目的』のためにしたのであると積極的に表現した文」である。

ここで、[表5-1]にテアルの位置付けを示す（網かけの部分）。ただし、以下の表は数ある構文のほんの一部を示したにすぎないことを断っておく。より精密で体系的な記述が求められるが、それは今後の課題である。

[ X : 情景描写文 ]		未然	進行	既成（結果）
自然にそうある		テイナイ	テイル	テイル
外部の力	人間や動物	テナイ	テイル	テアル
	自然の力	ラレテイナイ	ラレテイル	ラレテイル
	「被害」	ラレテイナイ	ラレテイル	ラレテイル
[ Y : 行為描写文 ]		未然	進行	既成（結果）
無意志的		テイナイ	テイル	テシマッタ
意志的	「目的」なし	テイナイ	テイル	テイル
	「目的」あり	テイナイ	テイル	テアル

[表5-1] <sup>1)</sup>

ここで一つ付け加えておくことがある。益岡（1992）では、テアルと外的連関

1) 2.3.1の「テアル、ラレテイル、テイルの選択の基準」の「原則」を参照のこと。

のある形式に「アル」と「テオク」があると論じている。[表5-1]に即して言えば、[X]のテアルは「アル」と、[Y]のテアルは「テオク」とつながりがある。[X]の「テアル」と「アル」との違いは、「アル」が外部の力を問題にしていないのに対し、「テアル」は外部の力を問題にしているところにある。ただし、「テアル」の動作主は背景化されるので、動作主が誰であるか分からない場合には「アル」に意味的に近づく。[Y]の「テアル」と「テオク」との違いは、「テオク」が動的な行為を表すのに対し、「テアル」は静的な状態（行為の結果）を表すところにある。

先に、[X]のテアルは「目的」の意味が入る場合も入らない場合もあると論じたが、次の(13b)は特別のシチュエーションがなくても「目的」の意味が加わってくる。これはなぜであろうか。

(13再掲) a. 黒板に字が書いてある。

b. 窓があけてある。

ここで特に注目されるのは、(b)の動詞が「有対他動詞」だということである。動詞の中には、「あける - あく、壊す - 壊れる、落とす - 落ちる」のように対応する他動詞と自動詞があるものと、「書く、作る、置く」のように他動詞形しかないもの、「咲く、光る、ある」のように自動詞形しかないものがある。これらを順に「有対他動詞」、「有対自動詞」、「無対他動詞」、「無対自動詞」と呼ぶ。西尾(1954、1978、1982)が繰り返し論及しているように、形の上では似ていても本当に「有対動詞」か否かの判定は難しい。さらに、第3章に論じたように自/他の区別も思うほど簡単ではない。しかし、有対動詞か無対動詞かの違いは、統語的に大きな違いをもたらすため、テアル構文を考える場合に避けて通るわけにはいかない<sup>1)</sup>。

動作の結果を表すアスペクト形式には、「テアル形」の他に「テイル形」がある。有対動詞の場合、テアル形は他動詞に、テイル形は他動詞にも自動詞にも付く。(127)の(a~c)を比較しよう。

---

1) 詳細は寺村(1984)、森田(1977、1981、1982、1989)を参照のこと。

- (127) a . 列車事故が起きたが、窓があけてあったのでそこから避難した。  
b . 列車事故が起きたが、窓をあけていたのでそこから避難した。  
c . 列車事故が起きたが、窓があいていたのでそこから避難した。

( a ) と ( b ) の下線部分はちょうどヴォイスのような関係になっており、同じような内容のコトガラを、( a ) では「対象」を主語にした「情景描写」として述べ、( b ) では「動作主」を主語にした「行為描写」として述べている。ただし、両者には重要な違いがある。それは「動作主」の解釈である。特別なシチュエーションのない限り、( a ) の動作主は「話し手以外の誰か」であり、( b ) の動作主は「話し手自身」である。もちろんシチュエーション如何では( a ) と( b ) の動作主が同一人物だという解釈も成り立つ。先に、あえて「同じような内容」としたのはそのためである。

一方、( a ) と ( c ) の下線部分はヴォイスの違いではない。両者とも「対象」を主語にした「情景描写」である。「動作主」が「話し手以外の誰か」と解釈されるのも同じである。違うのは、「目的」の意味の有無である。( a ) には「換気のため」などの目的の意味があるが、( c ) にはそれがない。このような違いは、「壊す - 壊れる」、「落とす - 落ちる」など他の有対動詞にも見られることである。

このことから、日本語では動詞に自 / 他の対応がある場合、次のように使い分けられていることが分かる。

(128) 行為の結果を表すアスペクト形式 (情景描写文)

- a . 他動詞 + テアル..... 「目的」の意味が入る  
b . 自動詞 + テイル..... 「目的」の意味が入らない

ところが、「書く、作る、置く」のように対応する自動詞のない動詞は、(128 b) の形にすることができない。そこで「目的」の意味が入らない場合も( a ) の形で間に合わせるしかないのである。

こうしてみると、[ 表 5 - 1 ] の [ X : 情景描写文 ] の段の「テアル」の部分

も厳密には有対動詞か無対動詞か、あるいは「目的」の意味が入るか入らないかによってさらに分ける必要がありそうである。

町田(1989)はこのような「目的性」が入るか否かの違いを、「継続動詞」と「瞬間動詞」の違いに求めている<sup>1)</sup>。それによると、「継続動詞」のテイル形は普通「結果の継続」を意味せず、「瞬間動詞」のテイル形は「結果の継続」を意味する。そのため、「継続動詞」のテアル形は「結果の継続」を表示するために積極的な役割を果たすが、「瞬間動詞」のテアル形は、

「すでに『テイル』形が結果の継続を優先的に意味している。従って、このことを明示するために『テアル』形をわざわざ使用する必要はないのである。このため、(4b)や(5b)の場合には、その結果の継続に何らかの強調が加えられて表示されているものと考えられる。このことから、(4b)や(5b)には、『目的性』といった付随的意味が生じているのだろう。」(町田1989:164-5)

というように、「目的」の意味が付け加わるとしている。(町田の示した例文は以下のとおり。下線と[ Y ]は筆者による)

- (129)(1)b. 太郎は額を飾ってある。 [ Y ]  
(130)(2)b. 太郎は洗濯ものを洗ってある。 [ Y ]  
(131)(3)b. 太郎は委員を選んである。 [ Y ]  
(132)(4)b. 太郎はお金を銀行に預けてある。 [ Y ]  
(133)(5)b. 太郎は大学を卒業してある。 [ Y ]

しかし、(129)~(133)は全て「目的」の意味が付け加わっていると考えられる。それは、これらの文が「行為描写文」だからである。もちろんそれは程度問題であって、(129)のように「目的」の意味が強い場合も弱い場合もあるものから、(132)のように常に強いものまでである。(129)、(130)で「目的」の意味を強く感じないのは、動作主が三人称だからである。[図4-1]に示したよ

---

1) 町田による「継続動詞」、「瞬間動詞」の定義は次のとおりである。「継続動詞」：「開始点と終結点が明確に意識できる、ある程度の時間的長さをもった事象を表示するので、完結相と非完結相の対立を最も際立たせる動詞」。「瞬間動詞」：「開始点と終結点の間に時間的区間は存在せず、両者が一致し、点としてとらえられる」。



うに、三人称の行為を表すときは「行為描写性」が低くなり、「情景描写文」に近づく。「情景描写文」は、[表5-1]に示したように基本的に「目的」とは関係ないのである。そのため(129)、(130)は「目的」の意味を強く感じないのである。

同じ三人称の構文でも(132)に「目的」の意味が強く感じられるのは、それが有対動詞だからである。有対動詞の場合は、(128)のような使い分けがあるため、テアルが付くと「目的」の意味が強く感じられるのである。

また、これ以外に動詞の「影響性」も「目的」の意味の強弱に関わっている。[図4-1]に示したように、影響性の低い動詞は「行為描写文」としての解釈を受けやすい。「行為描写文」は基本的に「目的」の意味が加わるため、(131)のような影響性の低い動詞は「目的」の意味が強く現れるのである。これを町田のように「継続動詞」と「瞬間動詞」の違いに求めると、(134)、(135)のような文を説明することができない。

(134) グラウンドを整備してある。(継続動詞、「目的」あり)

(135) オヤ、バットが放ってある。(瞬間動詞、「目的」なし)

以上の考察から次のように結論できる。「情景描写文」のテアル形は基本的に「目的」の意味と無関係であるが、有対他動詞のテアル形は「目的」の意味が強く現れる。一方、「行為描写文」のテアル形は[表5-1]に示したように、基本的に「目的」の意味が入る。また、「目的」の意味が強く現れる条件として、(a)動作主が話し手自身(一人称)である、(b)動詞の影響性が低い、といったことがあげられるが、(a)、(b)ともに結局は「行為描写性」の高さに還元されるものである。その他、当然のことであるが、「~のために」などのシチュエーションがあれば「目的」の意味が加わる。

#### 5.2.6 尋常な状態か異常な状態か

寺村(1984)はテイル、テアル、ラレテイルの「選択に関わるその他の要素」の(八)として、「描こうとする事態が、尋常な状態か異常な状態か」をあげて

いる。そして、「～テアルは——何の意図か分からないが人がある意図でしたことの結果だと見られるという意味で、——尋常な状態で使われるのがふつうだ」としている。

- (24) a . オヤ、アソコニオ金ガ落ちテイル
  - b . \*オヤ、アソコニオ金ガ落トシテアル
  - (25) a . 金魚ガ死ンデイル
  - b . 金魚ガ殺サレテイル
  - c . ?金魚ガ殺シテアル
  - (26) a . 金網ガヤブレテイル
  - b . 金網ガヤブラレテイル
  - c . 金網ガヤブツテアル
  - (27) a . 高速道路ノアチコチデ、野ウサギガハネラレテイル
  - (28) b . \*高速道路ノアチコチデ、野ウサギガハネテアル
- ( (24) ~ (28) 再掲 )

(24) ~ (28) は全て「情景描写文」である。(128) に示したように、有対他動詞のテアル形は「情景描写文」でも「目的」の意味が加わる。そのため、上で非文となっているものでも、話し手が「誰かが何かのためにそのような行為をした」という状況を把握して述べたのなら、全て適切な文である。ただ、日常生活でそのようなことがあまりないため、奇異に感じるだけであり、単に、動作主の「意志」の有無で説明できるのである。これを寺村のように「尋常 / 異常」という区別で処理しようとしても、すぐに反例ができてしまう。

- (136) 高速道路のあちこちに、バリケードが仕掛けてある。 (異常)
- (137) オヤ、あんなところにユニホームが干してある。 (異常)

このように、「異常」な状態にでもテアル構文を使って表現することは可能である。

### 5.3 第5章のまとめ

本章では、テアル構文の名詞項について考察した。ここでは、「動作主の人称」や名詞の「有情/非情」、および「～ハ～ガ/ヲ～テアル」構文について見てきた。ここでは、「情景描写」と「行為描写」の解釈の違いに、語用論的な要素が関与していることを明らかにした。さらに、「目的」の意味には、処置が人間によるか否かということ以外に、「有対他動詞」か「無対他動詞」かということが関与していることも明らかにした。また、従来言われていたような、「尋常」な状態か「異常」な状態かということは、テアル構文の成否とは関係がないことを示した。

## 第 6 章 結 論

### 6.1 本研究のまとめ

本研究は、「テアル構文」の意味的・統語的特徴、および語用論的要因について考察した。これは日本語の構文、特に動詞構文の体系的な記述をする一環として行ったものである。研究の際には、テアル構文の「内的連関」と「外的連関」の両面から分析を進めた。

先行研究では、テアル構文に共通する意味を、「意志的行為の結果に重点が置かれる『結果相』の表現」とされてきた。たしかに、テアルはアスペク的な意味を持っているが、ヴォイス・モダリティ的な側面も考慮して分析を進めなければ、その実体は浮かび上がってこない。また、従来、無意志のテアル構文や「～ト/ニ/ ～テアル」構文の考察が、見逃されてきた。

そこで本研究では、先行研究では見逃されてきたテアル構文を分析対象に含め、かつ、ヴォイス・モダリティ的な側面も考慮に入れて考察をした。分析は構文の違いを明確にするところから出発した。それがテアルの様々な意味に反映していると考えたからである。また、先行研究では事実の記述に終わっているところにも目を向け、「なぜ、そのような現象が生じるのか？」という疑問を投げかけ、その原因を解明することにも努めた。

「内的連関」に関しては、テアル構文を形式面から「～ガ～テアル」と「～ヲ/ニ/ト/ ～テアル」の二種類に分け、それぞれ意味的に「情景描写文」、「行為描写文」と命名した。そして各構文は取りうる動詞の特徴の違いがあり、前者は「影響性」、後者は「意志性」と「影響性」が関与し、その程度が高いほどテアル形になりやすいことを明らかにした。こういった現象は、「テアル」自体に備わっている意味ではなく、各描写文の違いに反映されている。

同じく、「内的連関」に関して、両構文の連続している様子を見た。そこでは、動詞の「影響性」とともに、動作主が「話し手自身」であるか「他者」であるかという「人称制限」も関わっていることを明らかにした。典型としては、「情景

描写文」では、「影響性」の低い動詞が許容されにくく、「他者」の行為を表すという特徴がある。一方「行為描写文」では、相対的に「影響性」の低い動詞でも許容されやすく、「話し手自身」または「話し手が『感情移入』した者」の行為を表すという特徴がある。「影響性」と「動作主の人称」が変化するにつれ、一方の構文から他方の構文へと連続的に移っていく。

テアル構文に共通した意味的特徴は、「行為の結果に重点が置かれる『結果相』の表現」となる。それが「情景描写文」に使われると、「五感や心で捉えられた行為の結果生じる対象の状態」を表し、「行為描写文」に使われると「何かの『目的』のためになされた行為の結果」を表す。

「外的連関」に関しては、「テイル構文」、「ラレテイル構文」とのつながりを考察した。「テイル」は「テアル」と同様に「結果相」を表す（「継続相」を表すこともある）。「情景描写文」の場合、「テイル」が「自然にそうある」場合に用いられるのに対し、「テアル」は「人間や動物による」場合に用いられるという使い分けがある。また、「行為描写文」の場合、「テイル」が「目的」の意味を含意していないのに対し、「テアル」は「目的」の意味を含意しているという違いがある。また本研究では、「有対他動詞」のテアル形には「目的」の意味が入ることを明らかにした。「ラレテイル」は受動文であるため、「対象」を主語にする「情景描写文」に使われ、その場合は「被害」の意味が加わる。

## 6.2 残された課題と今後の展望

テアル構文の考察は、テアル自体の解明にとどまらず、テイル構文など他の形式の分析にも関わっている。本研究で呈示した「外的連関」は、そういった日本語の構文全体の解明の一助となっている。しかし、テイル、テアル、ラレテイルの使い分けも、まだ完全に解明されたわけではない。ラレテアルという形式の許容される原因については、先行研究以上のことは言えていない。「動作主の抑制」に関しては、今のところ、（「情景描写文」では）「動作主を表示しないときに使われる形式が『テアル』である」としか言えない。いわゆる「他動詞」のテアル形は、それで一つの「自動詞」のような働きをしており、「動作主の抑制」はそのことと関係していると思われるが、この点についてはまだ十分に分析できて

いない。これらの問題に関しては、今後の課題としたい。

今回の分析により、「テアル」は単なるアスペクトの形式ではなく、ヴォイス、モダリティとも関わっていることが分かった。ヴォイスに関しては、「ガ - ヲ」交替という現象が見られる。「ガ - ヲ」交替は、「希望」を表す「～ガ～タイ」と「～ヲ～タイ」、「可能」を表す「～ガ～デキル」と「～ヲ～デキル」など、日本語の文法研究でしばしば問題となっている現象である。ここに、テアルの研究による成果が生かされなければならないが、これも今後の課題である。モダリティとの関係で言えば、「行為描写文」に使われるテアルには、「意志動詞」とのつながりが見られる。この点についてもより深い研究が必要である。

また、動詞にテアルが付くのか付かないのかが、動詞の「影響性」や「意志性」の程度を測るリトマス紙にもなっていることが分かった。個人によって、テアルを取る許容度に違いがあるが、許容する人の割合が高くなるほど、「影響性」や「意志性」の程度も高くなると考えられる。

このように、テアルの研究により、これまで個別に分析されてきた文法現象が、一つにつながっていることが分かってきた。これまで、アスペクト、ヴォイス、モダリティとして異なるカテゴリーに入れられていた文法現象も、実はどこかでつながっていると考えられる。本研究で行った「テアル構文」の分析結果は、日本語のその他の現象の解明にも役立つ。さらに、世界の諸言語に向けて有益な情報を提供することも可能なはずである。

## 参考文献

- 井上和子（編）．1989．『日本文法小事典』．大修館書店．
- 奥津敬一郎．1984．「文の組み立て SOV構造と<たちば>」『講座 日本語の表現2 日本語の働き』野村雅昭（編）．192-222．筑摩書房．
- 影山太郎．1993．『文法と語形成』．ひつじ書房．
- 笠松郁子．1993．「**「しておく」**を述語にする文」言語学研究会編『ことばの科学6』117-39．むぎ書房．
- 菊地康人．1984．「日本語の構文論研究の小史・動向・展望」『東京大学言語学論集'84』．91-148．
- 金水 敏．1994．「連体修飾の「～タ」について」『日本語の名詞修飾表現について』田窪行則（編）．29-65．くろしお出版．
- 金田一春彦．1950．「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦（編）．1976．5-26．むぎ書房．
- 工藤真由美．1991．「アスペクトとヴォイス」『現代日本語のテンス・アスペクト・ヴォイスについての総合的研究』1988－1990年度科学研究費報告書一般研究（B）課題番号63450058．5-40．
- 小泉 保他編．1989．『日本語基本動詞用法辞典』．大修館書店．
- 高橋太郎．1969．「すがたともくろみ」『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦（編）．1976．117-53．むぎ書房．
- ．1976．「解説 日本語動詞のアスペクト研究小史」『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦（編）．1976．329-60．むぎ書房．
- ．1985．『国立国語研究所報告82 現代日本語動詞のアスペクトとテンス』．秀英出版．
- 竹沢幸一．1991．「受動文、能格文、分離不可能所有構文と「ている」の解釈」『日本語のヴォイスと他動性』仁田義雄（編）．59-81．くろしお出版．
- 角田太作．1991．『世界の言語と日本語』．くろしお出版．
- 坪井美樹．1976．「近世のテイルとテアル」『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論

- 集』佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集刊行会（編）．537-60．表現社．
- 寺村秀夫．1982．『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版．
- ．1984．『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版．
- 西尾寅弥．1954．「動詞の派生について 自他対立の型による」『国語學』  
17．105-117．
- ．1978．「自動詞と他動詞における意味用法の対応について」『国語と  
國文學』55：5．173-86．
- ．1982．「自動詞と他動詞 対応するものとししないもの」『日本語教  
育』47．57-68．
- ．1992．「草木描写文にみる再帰的構文について」『文化言語学 その  
提言と建設』文化言語学編集委員会（編）．347-64．三省堂．
- 仁田義雄．1980．『語彙論的統語論』．明治書院．
- ．1982．「再帰動詞，再帰用法 Lexicon-Syntax の姿勢から」『日本語教  
育』47．79-90．
- ．1991．『日本語のモダリティと人称』．ひつじ書房．
- ．1993．「日本語の格を求めて」『日本語の格をめぐって』仁田義雄  
（編）．1-37．くろしお出版．
- 日本語教育学会（編）．1982．『日本語教育事典』．大修館書店．
- 野村雅昭．1969．「近代語における已然態の表現について」『論集日本語研究15  
現代語』土屋信一（編）．1983．152-64．有精堂．
- 益岡隆志．1984．「「てある」構文の文法」『言語研究』86．122-38．
- ．1987．『命題の文法 日本語文法序説』．くろしお出版．
- ．1992．「日本語の補助動詞構文 構文の意味の研究に向けて」『文  
化言語学 その提言と建設』文化言語学編集委員会（編）．532-46．三省  
堂．
- 松下大三郎．1924．『標準日本文法』．紀元社．
- 町田 健．1989．『NAFL選書9 日本語の時制とアスペクト』．アルク．
- 村木新次郎．1991．『日本語動詞の諸相』．ひつじ書房．
- 森田良行．1977．『基礎日本語』．角川書店．
- ．1981．『日本語の発想』．冬樹社．



- . 1982. 「日本語動詞の“意味”について」『日本語教育』47. 69-78.
- . 1989. 『基礎日本語辞典』. 角川書店.
- ヤコブセン, ウェスリー・M. 1989. 「他動性とプロトタイプ論」久野 暉・柴谷 方良 (編) 『日本語学の新展開』. 213-48. くろしお出版.
- 吉川武時. 1973. 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦編. 1976. 155-323. むぎ書房.
- . 1982. 「動詞のアスペクトについて」『日本語教育』47. 47-56.
- . 1989. 『NAFL選書 6 日本語文法入門』. アルク.
- 渡辺義夫. 1969. 「「～している」との関連における「～してある」」『福島大学教育学部論集』21. 55-63.
- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jacobsen, Wesley M. 1991. *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- McGloin, Naomi Hanaoka. 1989. *A Students' Guide to Japanese Grammar*. Tokyo: Taisyukan Publishing Company.
- Hopper, Paul J., and Sandra A. Thompson. 1980. Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56. 251-99.
- Ono, Kiyoharu. 1982. Is NP-wa NP-ga V-te ar ungrammatical? *Linguistic Inquiry* 13. 327-9.
- Perlmutter, David M., and Paul M. Postal. 1984. The 1-Advancement Exclusiveness Law. *Studies in Relational Grammar* 2. ed. by Perlmutter, David M. and Carol G. Rosen. 81-125. Chicago: University of Chicago Press.